

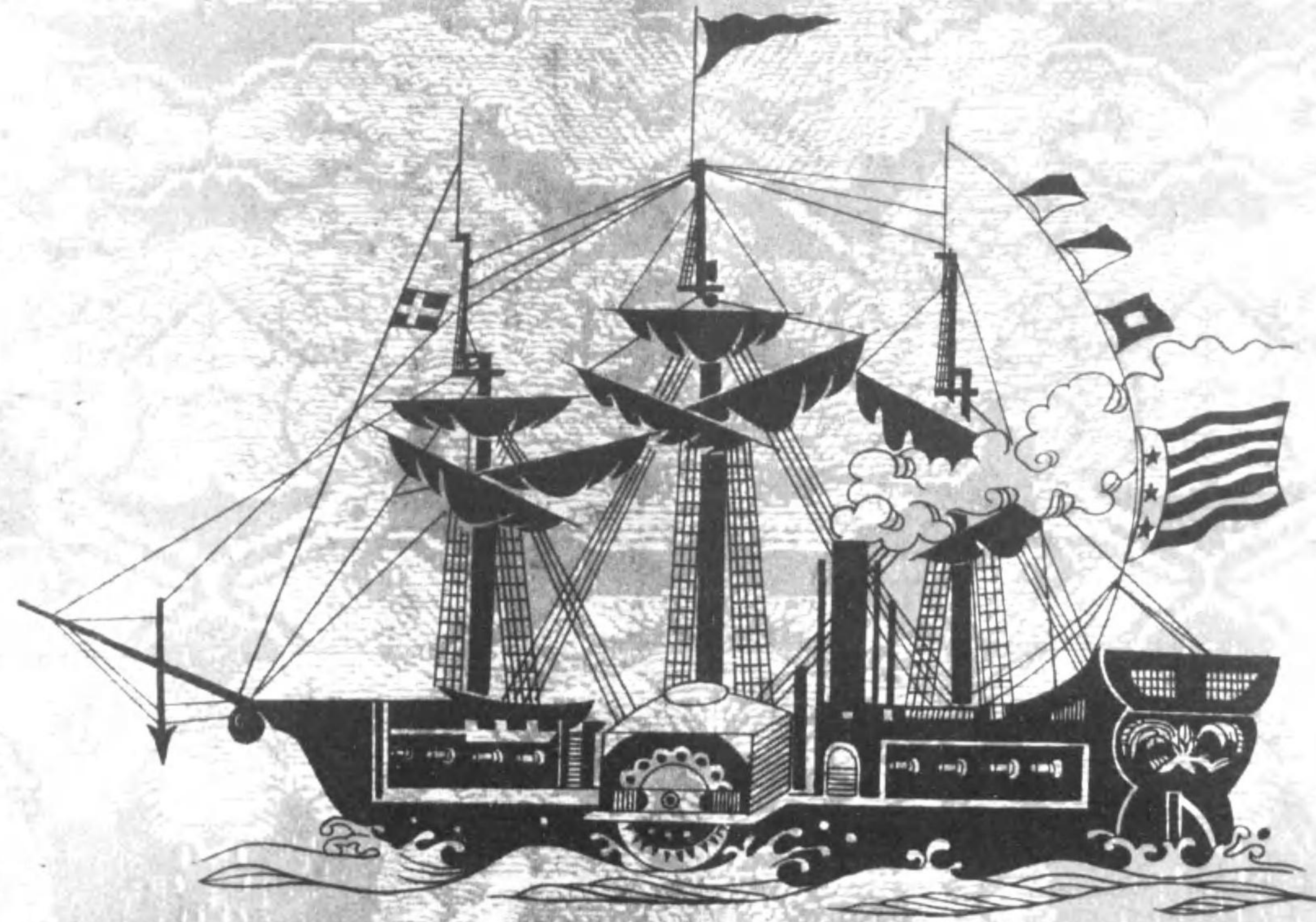
正大 · 治明 · 末慕

特267-123



123

史率十八顧圓



輯三十二第

行發 · 會協化文洋東 · 京東

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 | 1 2 3 4 |

◎ 内容解説 ◎

◎ 名士の遺墨

本輯にはオフセット二色版を以て幕末明治の名士一百有八名の遺筆を掲載して其風采を偲ばんとするものである。此等の名士の肖像及び行動は既に本史に掲げてあるが今、墨色淋漓たる遺筆を見れば、眞に其全人格を反映して興味津々として盡きず、維新史の裏面を語るものとして又、名士の行藏を知る點に於いて蓋し絶好の資料だと信ずる。

◎ 『幕末志士血盟状』

幕末尊攘論の沸騰せる時、其最も盛なりしは長州藩であつた。而して積極的に攘夷を主張する主戦黨と、軟論を主張する俗論黨とは互に軋轢して居つたが、主戦黨は神明に誓つて血盟状を作り、加盟者には高杉晋作を始め久坂玄瑞、尾庸造、品川彌二郎等あり又、書中には「我々死生を同じ正氣を維持するに付而者いか計離流頑沛に逢ふとも尊攘之志屈し撓べからず……」とあり、壯烈なる意氣紙上に横溢して居る。今、井上侯爵家の秘藏である。

◎ 佐田介石著「身代限を醸す所以の圖」

佐田介石は肥後熊本の眞言派の奇僧である。明治九年に「須彌地球熟妄論」と云ふものを書いて地平論を唱へ諸國を遊歴してまはつた。十年「視實等象儀詳説初篇(天地共和儀)」と視實等象儀とを東京博覽會に出品、十二年には「佛教創世記」を著し、十三年に「視實等象儀(上下二卷)」を完成したが、是等は今、東京淺草の傳法院に保存されて居る。又介石は我國の金銀の海外流出を憂ひて輸入品防遏、國産品愛用の「身代限を醸す所以の圖」を出版し、或はランプ亡國論を唱へて石油を使用する爲に日本の種油や蠟燭が賣れざるを始として國産品の潰滅するもの百三十一種に及ぶ事を論じたりした明治初年の反動期にある頑固黨の一人で、當時は佐田介石と丸山作樂、及び死ぬ迄「夷人原」と外人を呼んで居た内藤耻叟の三人が頑固派の重なる人と見られて居たのである。

幕末
明治
大正

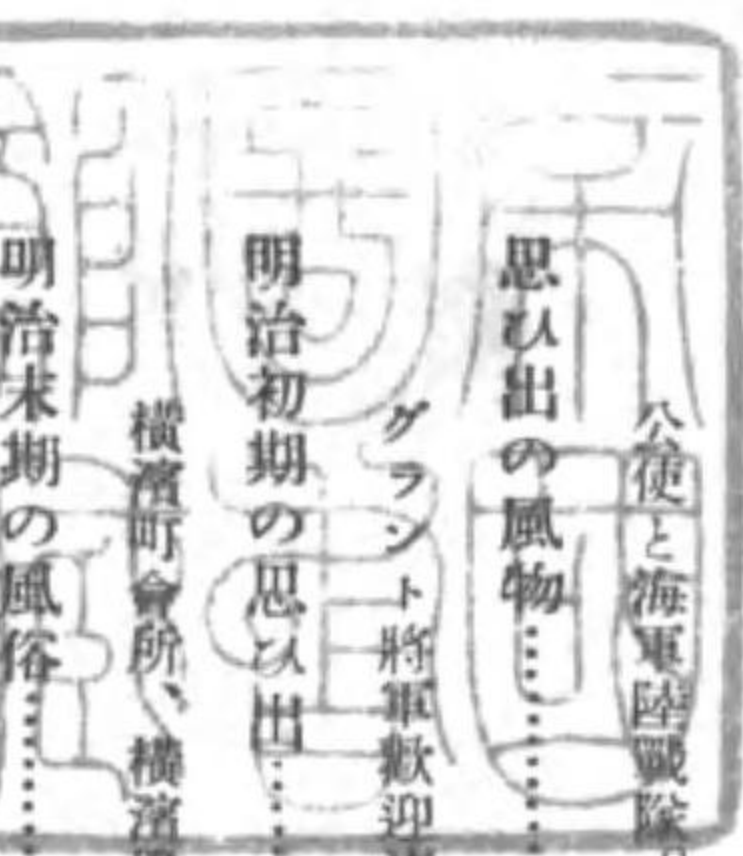
回顧八十年史 第二十三輯目次

玻璃版

琉球國王と慶賀使一行……………	五七四
琉球最後の國王尙泰、琉球國王の印、琉球の慶賀使一行、『おもろさうし』と首里の印。	
追憶の名士……………	五七五
明治初年の勝海舟、晩年の勝海舟、ロンドンに於ける長州藩留學生、明治十五年朝鮮事變當時の花房公使と館員、花房	
公使と海軍陸戰隊	
思ひ出の風物……………	五七六
グラント將軍歡迎流鏑馬、奈良正倉院御開封、日本人の手になれる最初の機關車の試運転、明治初年の宮之下。	
明治初期の思ひ出	
横濱町會所、機織燈臺局、創立當時の東京商船學校練習船。	
明治末期の風俗	
自轉車乗の女學生、婦人の乗馬(一)、婦人の乗馬(二)。	
幕末の時計……………	五七九
香時計、萬年時計、鎗打尺時計。	
幕末志士血盟狀……………	五八〇
幕末志士血盟狀。	
明治初年の輸入防邊宣傳……………	五八一
佐田介石著『身代限を醸す所以の圖』	
明治時代名士のおもかけ……………	五八二
三嶋通庸、馬場辰猪、長三洲、向山黃村、尺振八、柳川春三、野村文夫、菊地容齋、田崎草雲、月岡芳年、岩井半四郎	
田中平八、佐田介石、典侍高倉壽子、權典侍千種任子、權典侍姉小路良子、中島俊子、巖本嘉志子。	
維新史跡……………	五八三
六角獄舎の遺跡、郭公亭、上善寺内密議の室、横井小楠遭難の遺跡。	

オフセット二色版

山階宮晃親王、有栖川宮熾仁親王、有栖川宮熾仁親王、北白川宮能久親王、小松宮彰仁親王御筆蹟……………	一
德川慶喜、德川篤敬、德川慶篤、德川慶勝、德川昭武遺筆……………	二
德川齊昭、島津齊彬、毛利敬親、松平春嶽遺筆……………	三
三條西季知、壬生基修、東久世通禰、三條實萬、近衛忠熙遺筆……………	四



嵯峨實愛、鍋島閑叟、島津久光、山内容堂遺筆……………五

久我建通、中山忠能、九條道孝、柳原前光遺筆……………六

池田慶德、前田慶寧、鷺尾隆聚、伊達宗城、毛利元德、池田茂政遺筆……………七

徳川齊昭・藤田東湖合作、江川田庵、高島秋帆、佐野竹之助、有馬新七、宮部鼎藏遺筆……………八

藤田小四郎、武田耕雲齋、有村雄助、有村次左衛門、大關和七郎遺筆……………九

小松清廉、玉乃世履、巖谷一六、武市半平太、横井小楠、轟武兵衛遺筆……………一〇

吉田松陰、梅田雲濱、橋本左内遺筆……………一一

雲井龍雄、佐久間象山、梁川星巖遺筆……………一二

中山忠光、吉村寅太郎、平野國臣、美玉三平、高橋甲太郎遺筆……………一三

眞木和泉、久坂義助、伊藤甲之助、永井介堂、大橋訥庵遺筆……………一四

河井繼之助、村田清風、清川八郎、櫻田良佐遺筆……………一五

高杉晋作、坂本龍馬、前原一誠、江藤新平遺筆……………一六

島義勇、川路聖謨、丸山作樂遺筆……………一七

三條實美、四條隆謨遺筆……………一八

大原重徳、近衛篤磨、岩倉具視、姉小路公知遺筆……………一九

木戸孝允、大久保利通、西郷隆盛、伊藤博文、副島種臣遺筆……………二〇

勝安房、山岡鐵太郎、僧月照、陸奥宗光、榎本武揚遺筆……………二一

栗本鋤雲、小野梓、廣澤眞臣、元田永孚、重野安禎、中村敬宇遺筆……………二二

森有禮、新島襄、福澤諭吉、奥村五百子遺筆……………二三

税所敦子、品川彌二郎、廣瀬武夫、成島柳北、三島浦庸遺筆……………二四



琉球國王と慶賀使一行



右、琉球最後の國王尚泰
向侯爵家藏



中上、琉球の慶賀使一行
向侯爵家藏
明治五年、王政維新を慶賀の爲、東上
した一行の寫眞である。
前列、右より、管領官喜屋武親安上(日
幡主取)中央、正使伊江王子尚健、
左、副使向有恒宣野母親方朝保、
後列、右、外務省通譯、左、山内親安
上(評定所主取)

左、「おもろさうし」と首里の印
向侯爵家藏
「おもろさうし」は琉球諸國以來の歴史
を記した古典で、後に掲載のものは其
中の「首里王府のおさうし」で即ち第
一卷の扉である。上部に首里の印が捺
してある。此印は國內に使用し、辭令書
家譜等に押捺する。「おもろ」とは「神
歌」といふ事である。



中下、琉球國王之印
琉球國王の印であつて、右側には「琉球國王之印」とあり、
左側は滿洲國字で彫つてある。支那へ送る公文書に使用した
ものである。

の會務外て先館旅を耶利毛し特歡を行一萬はで延朝、著到に京東に月九し京上に共と海堂が健尚子王江伊使正りなど事す遣派を節使爲の賀慶新維政王は王國琉球年五治明
ぬせえ絶てけ掛に根が巖の心を代御きなき動して對に題御の『久契石亦』し席陪に會御談たれさ能で宮離は海堂。た居てつ断てつ其を費官てつ切詰に内館日毎が人理料び及吏官
を粘留るす封に王藩が泰尚。たれらせ讚賞を漢文學才其じ詠と『なか日今の伊見とり盛の醉でま葉紅の外のみとますはかみ流』はに題の席御の『醉に葉紅』又じ詠と『未らしつ離
るあでのためしげ奉を命朝てけ助を使正てい説を勢大の界世が海堂がたつあが論異はに中行一やるす受拜

追憶の名士



中、ロンドンに於ける長州藩留學生
 文久三年長崎より外國帆船に乗じてロンドンに留
 學せる長州藩留學生で元治元年(一八六四年)ロ
 ンドンにて撮影した寫眞である。
 前列、右、山尾庸三、廿八歳
 左、井上聞多(藝)三十歳
 後列右より
 遠藤謙助
 井上彌吉(勝)廿四歳
 伊藤俊輔(博文)廿四歳



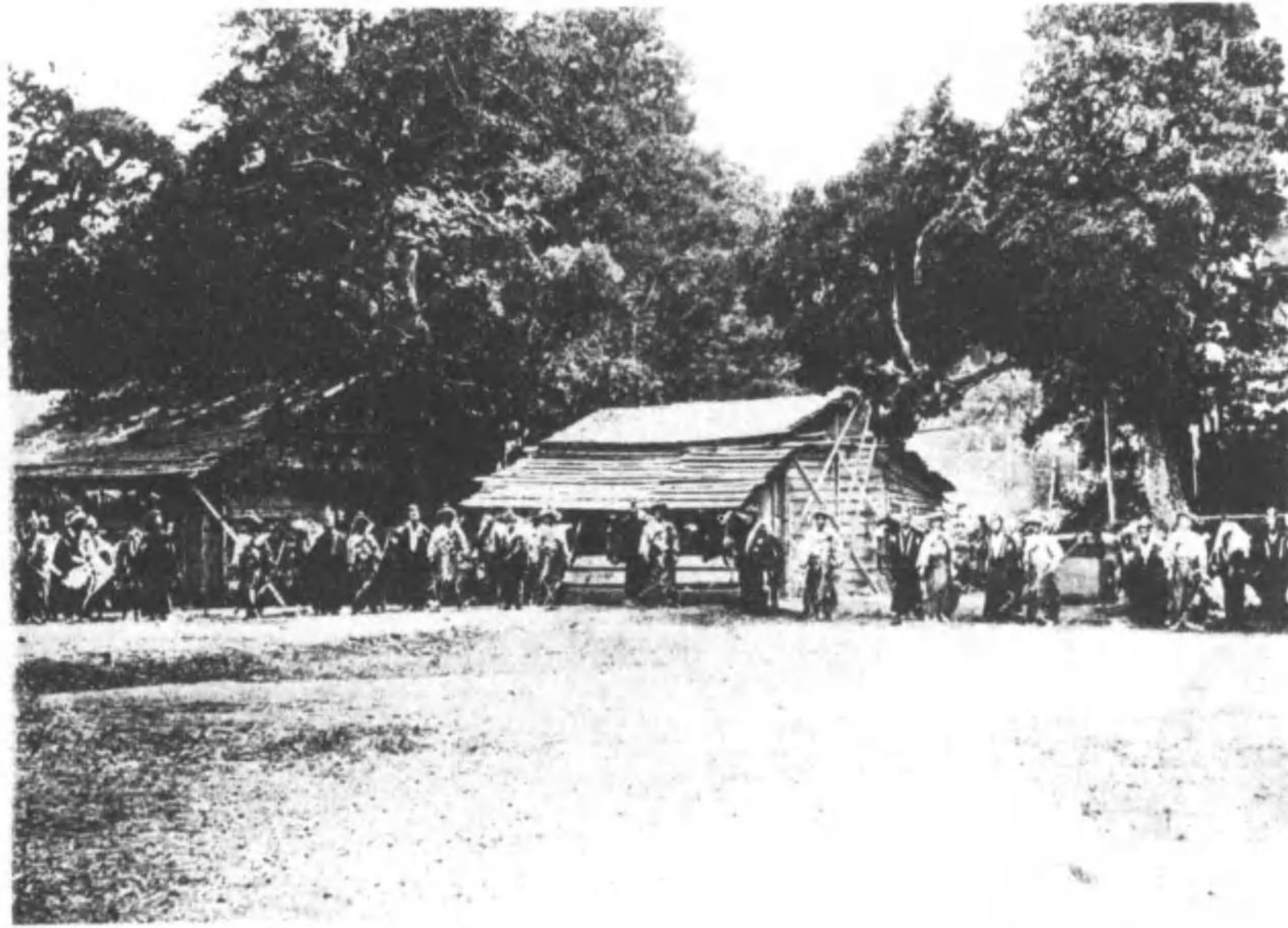
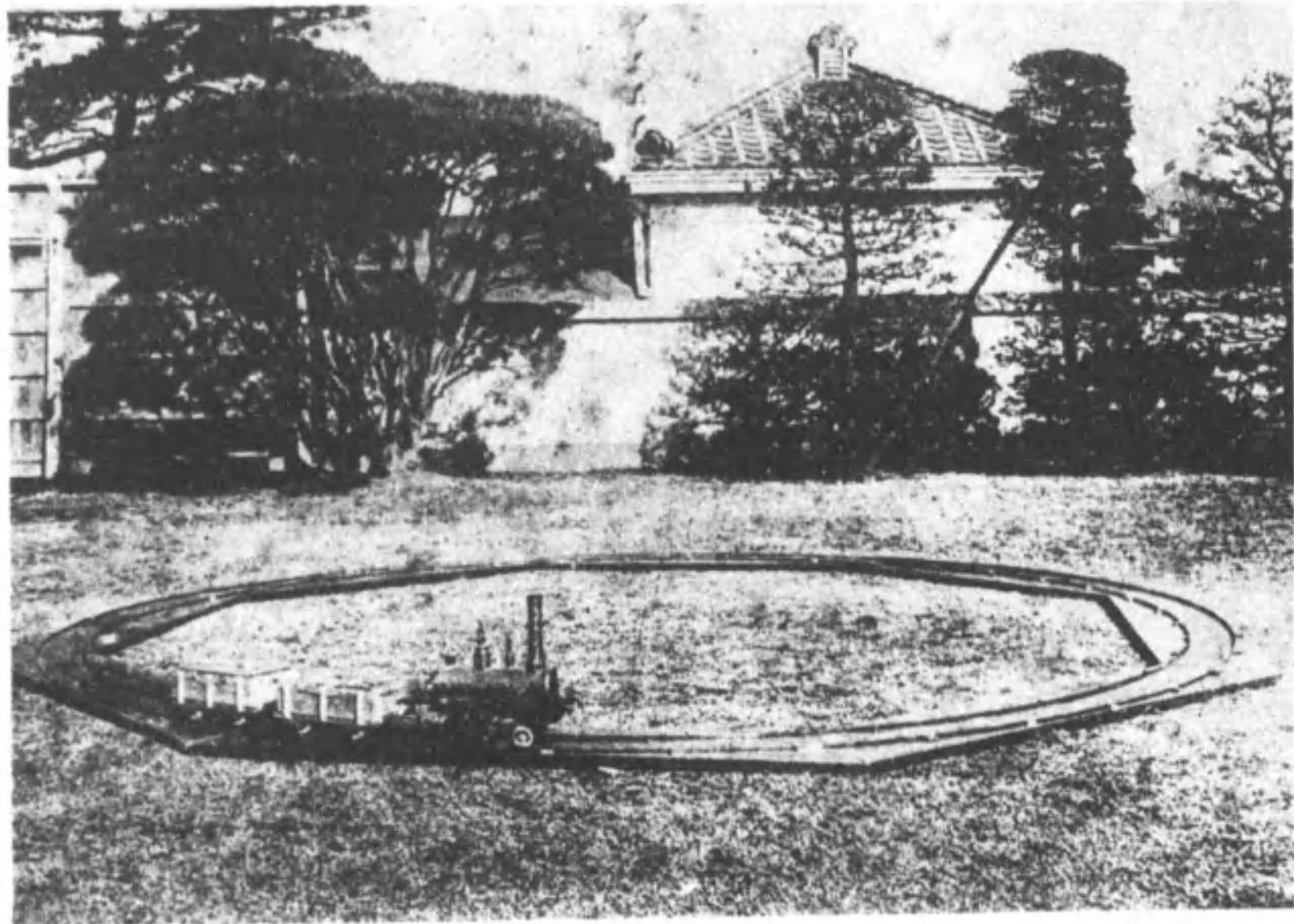
右上、晩年の勝海舟
 片岡茂三郎氏藏
 右下、明治初年の勝海舟



上左、明治五十年朝鮮事務臨時使館と花房公使
 下左、海軍陸戦隊と花房公使



物 風 の 出 ひ 思

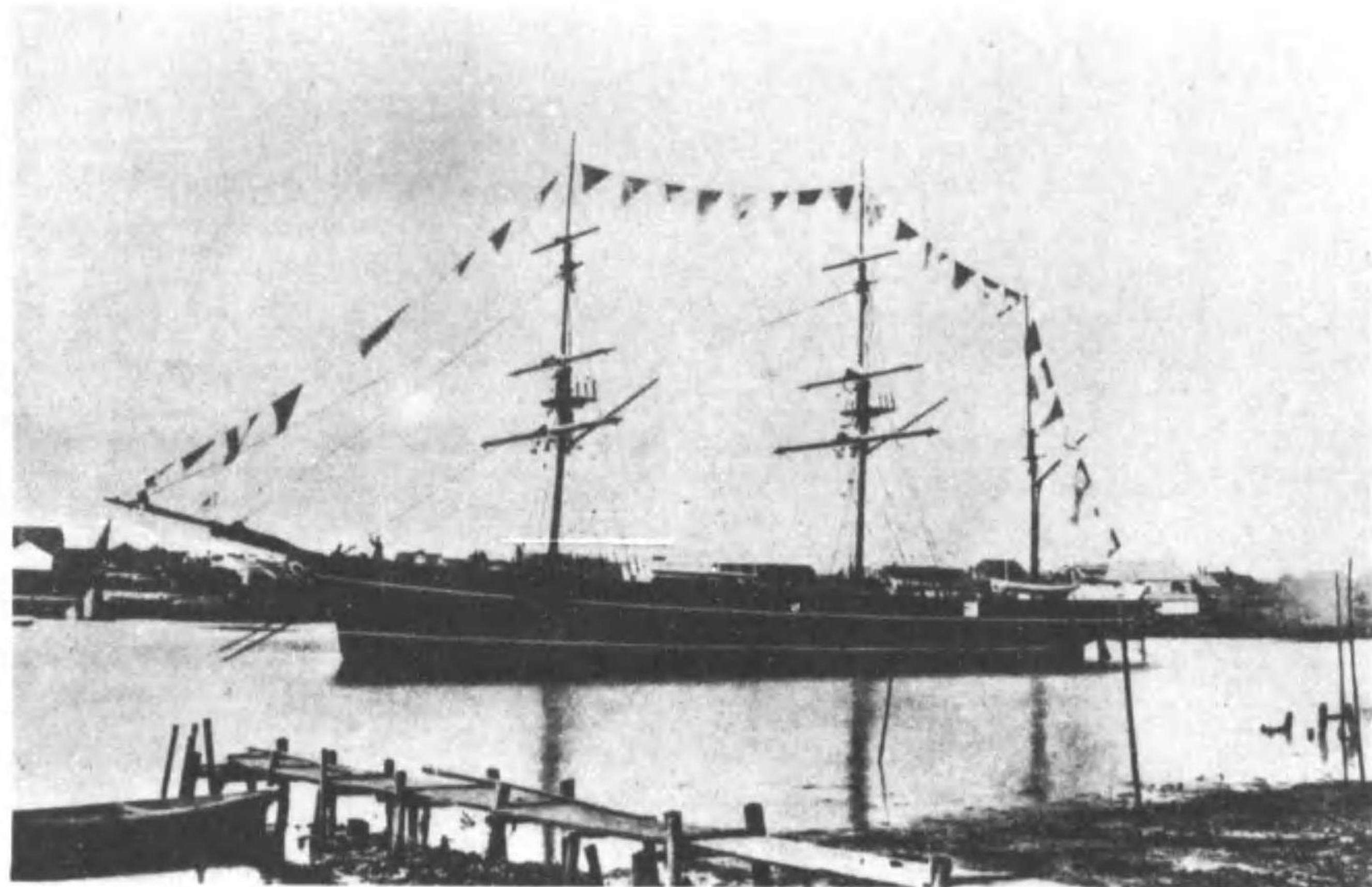


上左、日本人の手になれる最初の機関車の試運転
 安政二年佐賀藩練方の中村奇輔、石黒寛二、田中儀右衛門の三名
 が製作して運轉した機関車の模型であつて、寫眞は試運轉中の有様
 である。機関車の寫眞は本史に既に掲載してある。(鐵道博物館蔵)
 下左、明治初年の宮之下
 明治 六、七年頃の箱根宮之下の風景



上右、グラント將軍歡迎流鏑馬
 明治十二年七月來朝の米國グラント將軍歡迎の爲、上野公園に催さ
 れたる流鏑馬の勢揃。
 下右、奈良正倉院御開封
 明治初年に於ける奈良正倉院御開封當時の撮影。

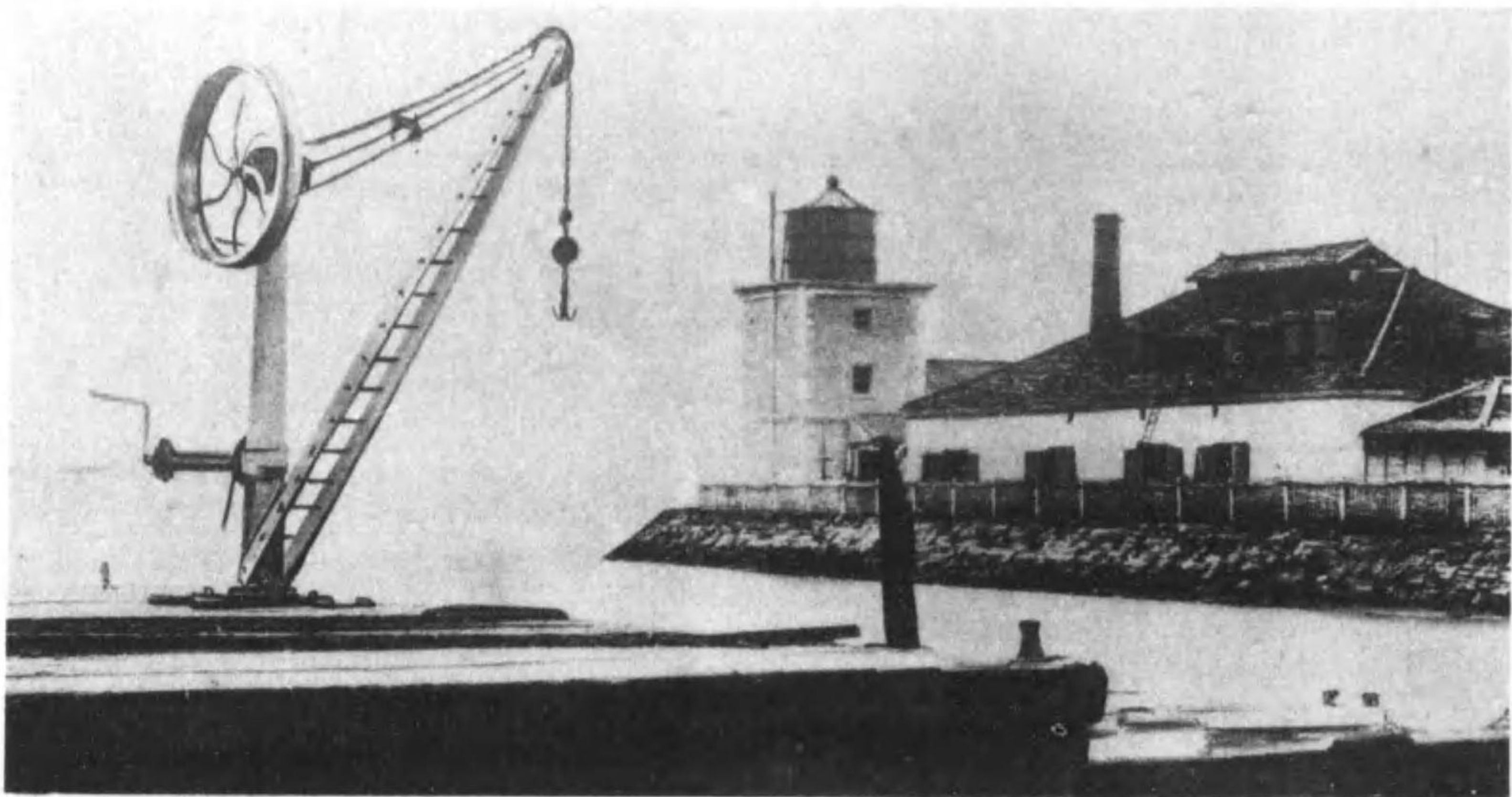
明治初期の思い出



左上、創立当時の東京商船学校練習船である
明治初年築地隅田川上に停った東京商船学校練習船である



右、横浜町會所
横濱市史編纂係蔵
明治七年の創設で横濱貿易商の體金によつて建てられたもので、中央に高塔があり大時計を供へて居たので俗に時計臺と云はれて市内の名物であつた。初は町會所と稱し、二十三年横濱貿易商組合會館と改めたが、更に横濱會館と改稱し三十九年十二月に焼失してしまつた。



左下、横濱燈臺局
横濱市史編纂係蔵
徳川幕府が慶應二年五月外國との條約に基いて八ヶ所の洋式燈臺を金で二箇の新設の明治元年英國技師プラントン及び助手三名が來朝して諸般の設計を爲し燈臺局は初めは木造であつたが明治七年三月十八日煉瓦造の燈臺局が完成し明治天臺及燈臺局階下の臨御あり、同夜の新式回轉燈の點火を天臺あせられた。

俗 風 の 期 末 治 明



右、自轉車の女學生
自轉車の輸入されたのは明治二十二年、三年頃と云はれ、二十三年頃にはゴム輪のものが輸入されて来た。當時一審八十五圓と云ふのであるから可成高價なものであつたが華族女學校の女學生が通學に愛用した。自轉車乘の元祖は、木内キヤウ子女史と云はれて居る。當時柴田環(今日の三浦環女史)も盛んに乗り廻し小杉天外の小説『魔風戀風』には管頭此流行を引入れてゐるので婦人間の流行熱が益々盛になつたものである。(寫眞木内キヤウ子史)



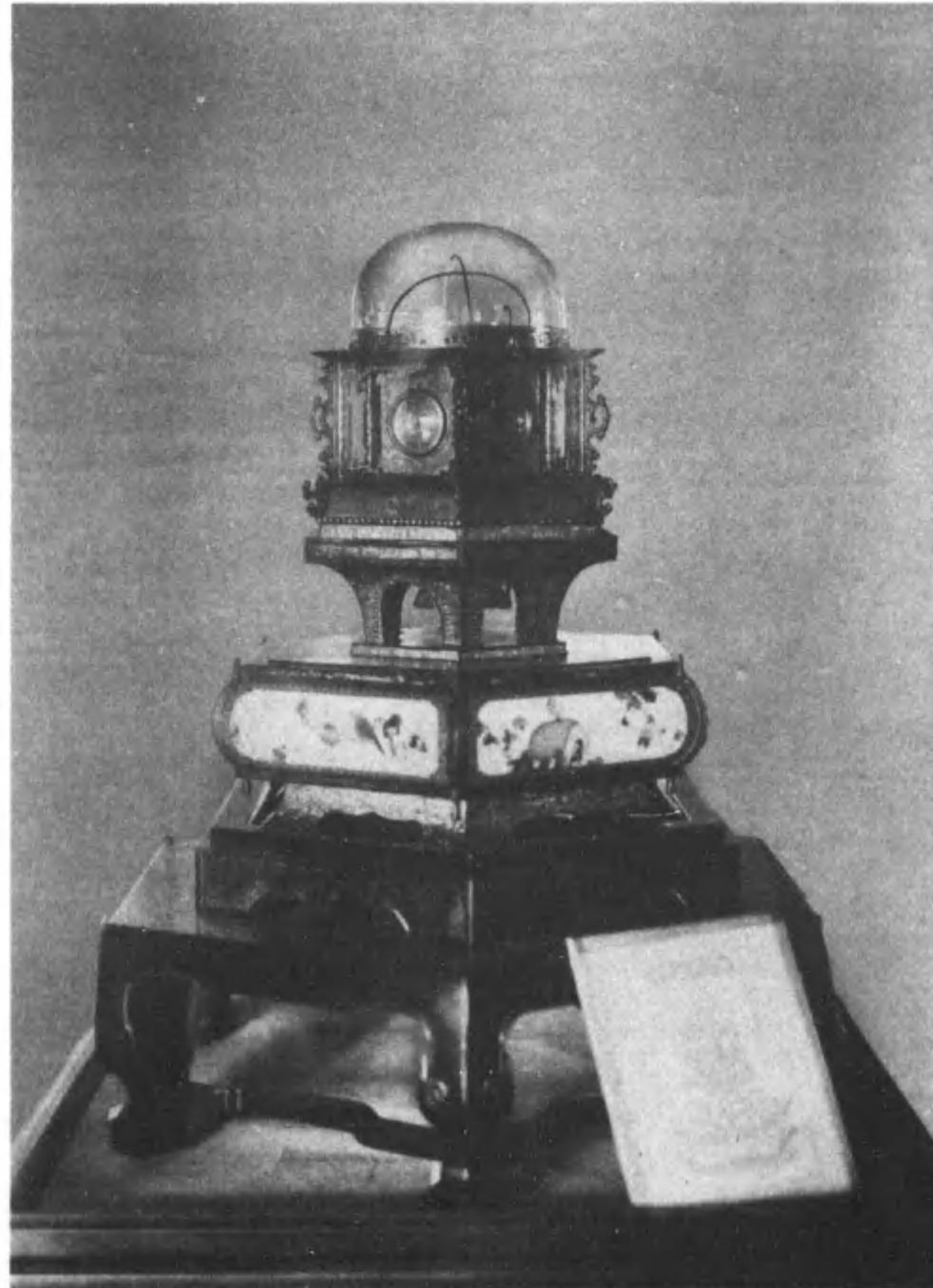
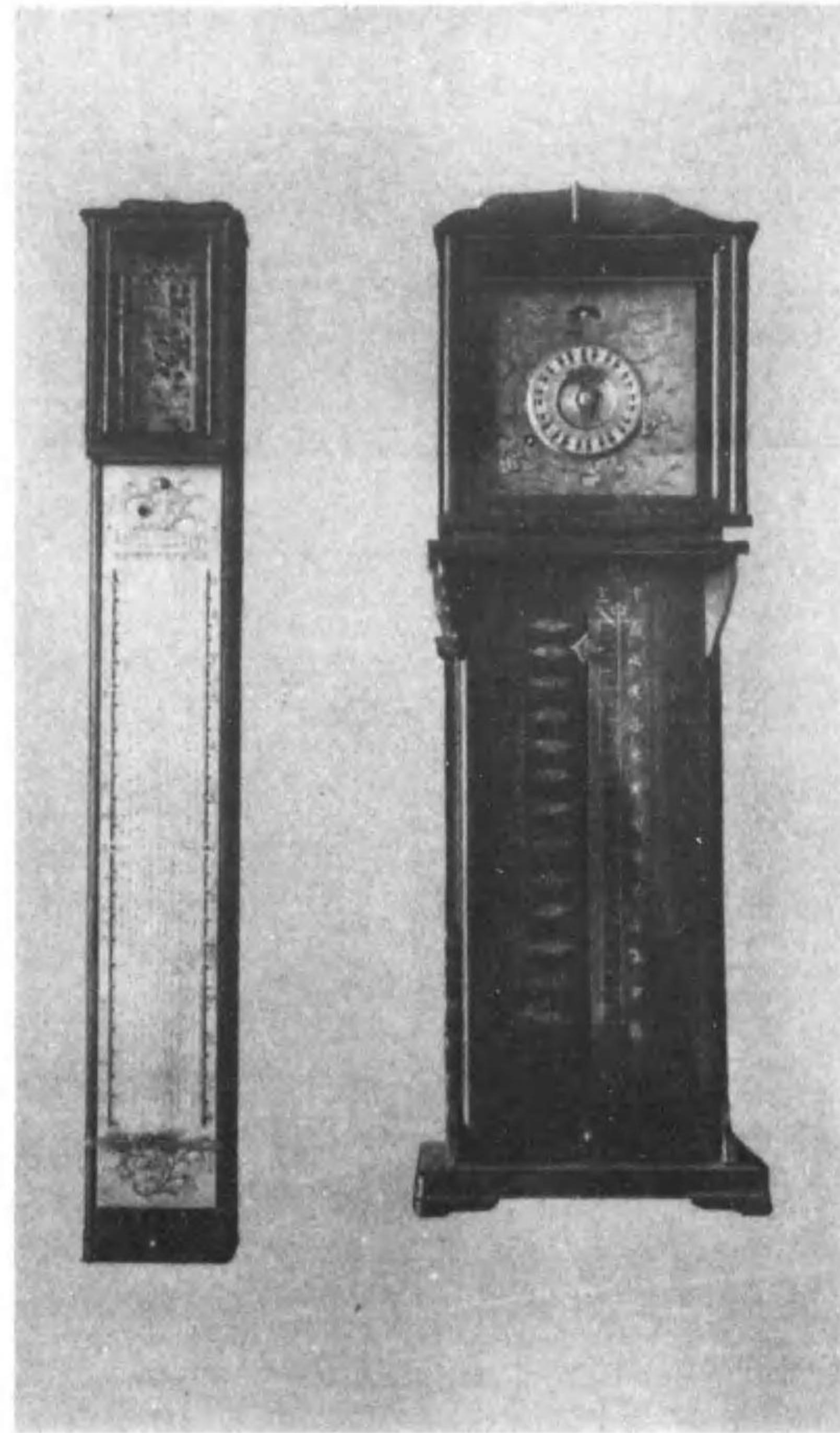
中、婦人の乘馬(二)
前田曙山氏藏
明治十年頃の新舊風俗の混淆時代には一方には新髪、帯刀の姿もあれば又一方には婦人の乘馬も流行となつて来た。然も此流行の氣は藝妓であつたと云はれる。川上貞奴が未だ芳町に藝妓をして居つた時分に、得意の大坪流の腕前を揮つて街頭へ進出したと云ふ事、川上貞奴は舞臺でも眞物の馬を乗り廻して評判を取つて居たものである。藝妓間の流行がやがて女學生間の流行となり後に婦人界の流行となつたものである。寫眞の婦人は神倉文子。



左、婦人の乘馬(一)
前田曙山氏藏
明治十年頃には本所に草刈馬術練習所があつて女學生や婦人連練が習したものである。義經袴で男乗りと云ふ乗り方のもあれば又アンドン袴の横乗りのもあり、或は崩髪、或は下げ髪あり、風爽として都小路を乗り廻した尖端振りに流石の江戸ッ子も叱驚したものである。乗馬も今日の様な優秀なものではなく、駄馬も同様であつた。

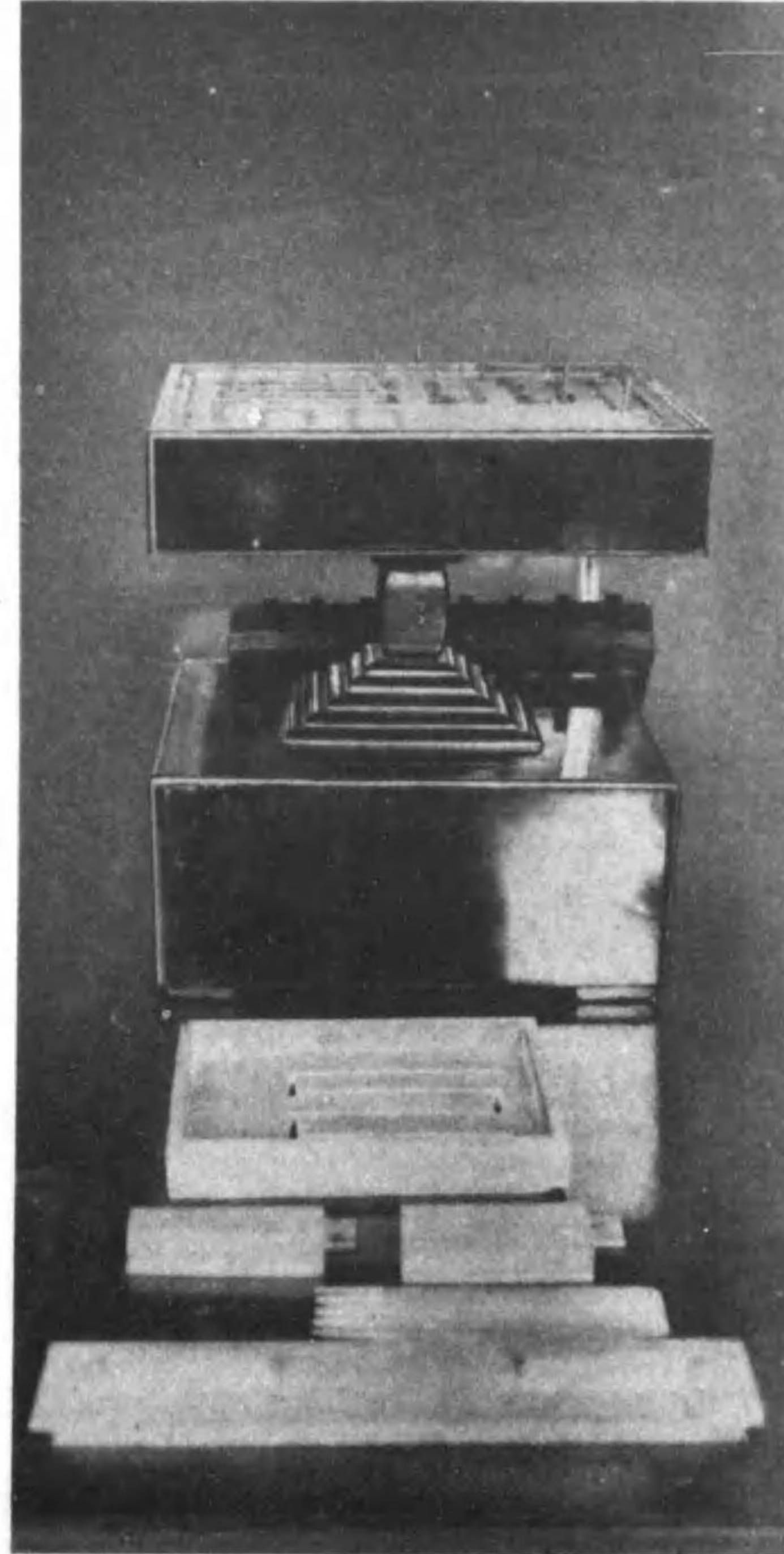
計 時 の 末 幕

廠氏衛兵林高 計時尺打鐘、左
列陳館文博學科京東
を盛日の度尺でつ下が板の形変、てつあで計時柱
。る居てつなには様る知を刻時し示指



作重久中田 計時年萬、中
列陳館文博學科京東
人の米留久來以年三永嘉、かた來出がのもな巧精れは現がのもる作を計時てしら凝を失工もて國我來以てれら贈を計時らか(牙班四)ヤニオスイが康家川徳
。るあで計時の巻日百四てつ云と計時年萬は計時此
。るあで品名的界世で廠所の氏衛兵林高、造製の重久中田

廠氏衛兵林高 計時香、右
列陳館文博學科京東
灰の上雷一、て具道る量香はのるあに方力前手
所の棒てし點を火り、端一き置を並筋の香に中の
。るあでのもる計を同時で



(579)

たし作製の重久中田、人の米留久來以年三永嘉、かた來出がのもな巧精れは現がのもる作を計時てしら凝を失工もて國我來以てれら贈を計時らか(牙班四)ヤニオスイが康家川徳
的界世はで日今で品優の々中亦も飾裝でのもため極を巧精に常非ためしせ照對を等月、日週、間時本日、同時洋四は計時の巻日百四るす稱通と計時年萬に殊りあが品逸々中にも
。るあで廠所の氏衛兵林高は今、るあでのもの判評てしと品逸の

明 治 時 代 名 士 の お も か げ



三 春 川 柳
(者 始 創 聞 新 外 中)



村 黄 山 向
世 三 シ オ レ キ ナ、人 詩
(寸 攝 に)



洲 三 長
(家 書)



八 振 尺
(者 學 英)



猪 辰 場 馬
(士 名 黨 由 自)



猪 通 島 三
(監 總 視 警、事 知 縣 島 福)



八 平 中 田
(寸 攝 と 平 糸 の 下 次)



郎 四 平 井 岩
(優 名)



年 芳 岡 月
(寸 攝 と 藤 大、家 畫)



雲 草 崎 田
(家 畫 王 勤)



野 容 地 菊
(家 畫 王 勤)



夫 文 村 野
(者 始 創 聞 珍々 聞)



子 志 意 木 巖
しと 著 譯 の 『子 公 小』
(り な 名 有 て)



子 俊 島 中
(者 論 權 女、史 女 櫻 潮)



侍 典 權
子 瓦 踏 小 姉



侍 典 權
子 任 種 千



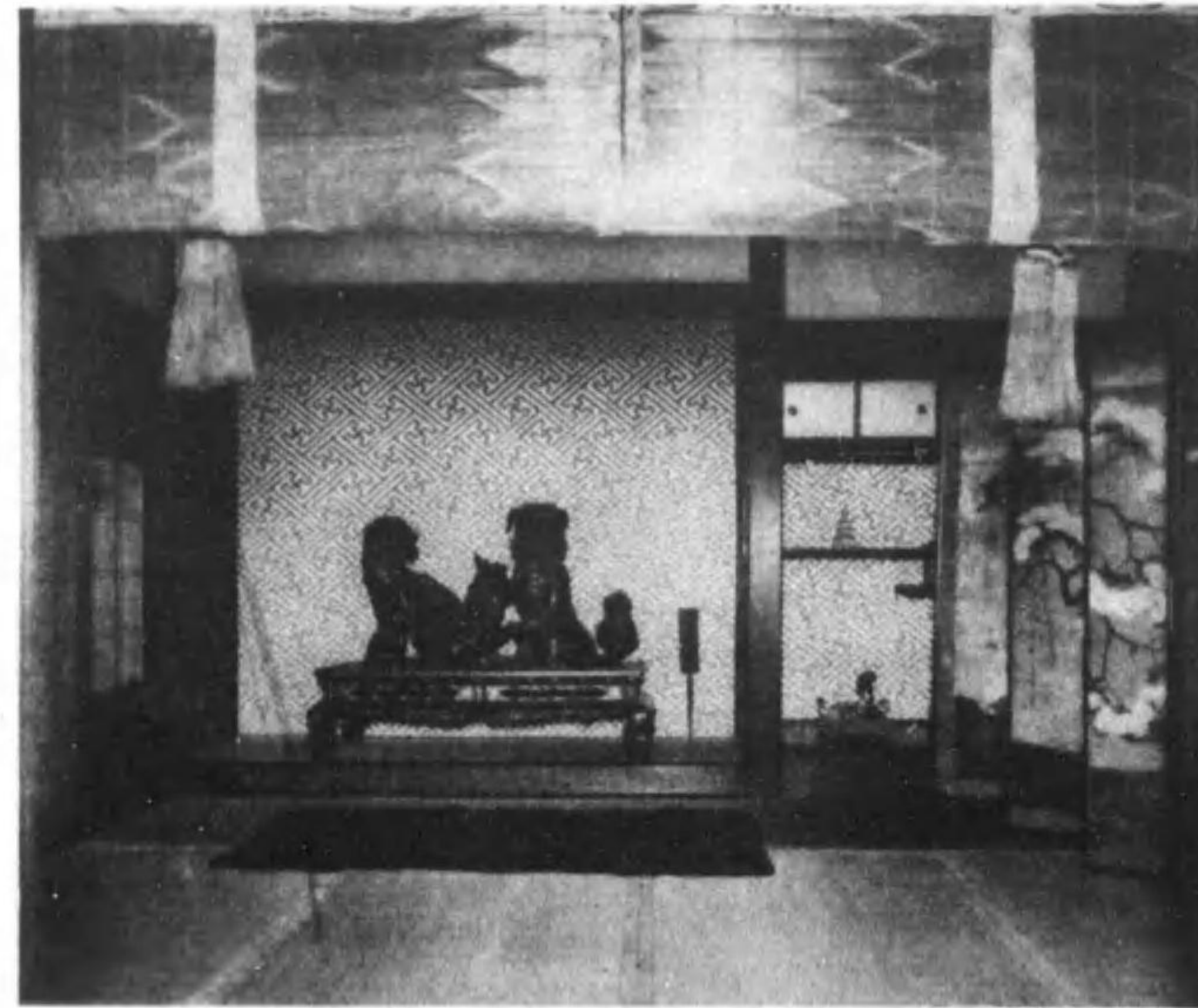
侍 典 權
子 壽 倉 高



石 介 田 佐
に 等 論 國 亡 プンク、價
(り な 名 有 て)

跡 史 新 維

有、六角獄舎の遺跡
京都六角通千本東にあつて六角
獄舎の遺跡である。元治元年七
年十九日の甲子禁門の變に際し
て志士の被獄を恐れた奉行龍川
播磨守具知は入牢中の志士平野
國臣、三條公大夫丹羽出雲守正
秀、三條公大夫丹羽出雲守正
澄等三十三名を取調も爲さず片
少端より斬首した所で、今は京
都教育會の手により寫眞の如き
碑が建てられて居る。



中下、上善寺内所蹟の堂
上善寺は京都市上京區鞍馬口寺
町東入にある。淨土宗で該前の
松平春嶽の菩提寺であつた爲に
春嶽の上落するや、此寺を宿陣
として薩摩の小松帶刀、四郷吉
之助、大久保市藏等と國事を密
議した室である。

左、横井小楠置難の遺跡
横井小楠は熊本藩細川氏の臣で
ある。開國論を唱へて江戸にて
刺客に襲はれたが、明治元年三
月徴士となり、後參與となつた
明治二年正月五日退朝の途中寺
町丸太町下ルの路上で刺客十二
三名にヒストルを以つて襲はれ
小楠は奥を出で短刀を以つて戦
つたが遂に落命した。今日「横
井小楠殉節」の碑が建て、あ
る。

山階宮晃親王

詩

賦城州栗栖野萩

茫茫栗野秋風冷。千古蕭萩處處華。只恐樵童爲牧犢。無心來往自相誇。

有栖川宮熾仁親王

筆蹟

寶祚之隆、當與天壤無窮、

有栖川宮熾仁親王

詩

銀河沙漲三千界。梅嶺花開一萬株。

北白川宮能久親王

筆蹟

滿招損、謙受益、

小松宮彰仁親王

詩

水邊團月翻歌扇。風裡垂楊學舞腰。

山階宮晃親王

此は余の所居に在りて
好く華を好む所なり
又今年は白の空
中此城の空初野秋

有栖川宮織仁親王

寶祚之隆當與
天壤懸窮矣

有栖川宮織仁親王

銀河沙漲之不思梅
花志用一萬株

小松宮彰仁親王

水邊團月翻歌扇
風裡垂楊學舞腰

彰仁書

北白川宮能久親王

滿招損謙受益

能久親王書

德川慶喜

書

博施於民而濟衆。

德川篤敬

書

至大至剛

德川慶篤

書

成者非自成己而已也。所以成物也。

德川慶勝

詩

驟雨

雲山四起雨傾盆。風送電光射水軒。洗盡炎威慕然霽。清涼如掬月黃昏。

德川昭武

書

務實不求華。

德川慶喜筆

博採於民而能

濟眾

男爵 淺澤榮一氏藏

德川慶篤筆

侯爵 德川國順氏藏

德川篤篤敬筆

成者亦自成已
而已之所成物
也

德川慶勝筆

水取周二氏藏

至大玉到

侯爵 德川國順氏藏

德川昭武筆

侯爵 德川國順氏藏

雲山四起雨傾盆風
送電光射水軒洗
盡苦成葛然霽清
涼如掬月黃昏

初實不末為

德川齊昭

種梅記

予自少愛梅。庭植數十株。天保癸巳始就國。國中梅樹最少。南上之後。每歲手直採梅實。以輸於國。使司園吏種之。借樂園及近郊隙地。今茲庚子再就國。所種者蔚然成林。開華結實。適會弘道新成。乃植數千株於其側。又令國中士民。每家各植數株。夫謀之爲物。華則冒雪先春。爲風騷之友。實則含酸止渴。爲軍旅之用。嗚呼。有備者无患。數歲之後。文施布國。軍儲亦可充積也。孟子不云乎。七年之病。求三年之艾。可不戒哉。聊記以示後人。云。天保十二年歲次庚子冬十月念五日景山撰并書

松平春嶽

錄杜少陵詩

磨刀鳴咽水。水赤及傷手。欲輕腸斷聲。心緒亂已久。丈夫誓許國。憤惋復何有。功名圖麒麟。戰骨當速朽。

島津齊彬

四海波靜

異國の船のたよりも跡たえて

なみてつかなる四方の海はら

毛利敬親

修身齊家

徳川齊昭筆

伯爵香川敬三氏藏

種楮記

予自少歲種楮數十株受保榮已始就國中種樹家少常上之
後喜歲手言採楮實以輸於國使司國史禮之借樂園及近郊隙地
令其屬子再就國所種者鬱然成林開華結實適會知造館新成乃
種穀千株於其側又令國中士民每家於種穀株夫某之無物華則
冒靈先春無風驟之受實則全收此河為軍旅之用嗚呼有備無患
患穀歲之後支旋帝國軍備亦可充積也孟子不云乎七年之病求
三年之艾可不蒸哉拜記以示後人云
天保十六年歲次庚子冬十月念五日

景山堪井書



松平春嶽筆

本山彦一氏藏

磨刀鳴咽水、亦用倚手、砥經
結路考、以終、業已久、去事更、並了
研、固、情、悅、後、月、有、功、名、固、致、驂
戰、骨、尚、速、朽、錄、杜、之、後、時、
春嶽圖

島津齊彬筆

公爵島津忠重氏藏

四海波、
靜、
有、志、川、之、方、志、海、之、新、楮

毛利敬親筆

毛利元明氏藏

所身為家

三條西季知

七卿良竄の圖に

ありそ海の有し事を忘れざるは、後瀬の山のいましめ共いふべからむ、こゝに土方大内史の乞るゝまに、澤の從三位の畫れしとて携らしれを、つらゝみるに、實さもと思ひ出るふしこそ多かれ。抑兒の繪はしも、去し文久三とせの秋、内日さす京のうち、物さはがしくつねならぬ事の出て、いよゝますゝ思ひをこらし、年頃御國の御爲に心を盡されたる三條の太政大臣、東久世の侍從の長、四條の陸軍の少將、壬生のやま形縣の權令、澤の從三位、錦小路の贈止四位たちの、深き故よし有て、おもひ立れたるわたくし成振舞は、罪さがたかれと、いかゞはせむ。今は其こゝろざしを報ひまつらんの外なきからに、續麻成長門の國さして物せられぬ。己をちなく年さへ老にたれど、いかでおとるべきかはと、共に京をのがれ出たりし時のさまなりけり、工にも盡れたる哉。かしくも乞れにけるかな。共に行れしとちなりければ、其心しらむも只ならずこそみゆれ。白纒つくしの國にうつろひし後も、幾許の事ありしか、互に雄心をふり起しつゝ、五年の春秋を送りける程に、懸卷もかしく仰ことかゝふりて、京に歸りのぼりける、其うれしさとへんに山なほ高からず、うみ猶ふかゝらずとこそいふべく有けれ。是につけ彼につけつゝ口惜かるは、贈正四位の獨なり、彼長門の國にて身まかれて、この御さかりをあふがざるは、悲しとやいはむ、うれたしとやなげがまし。我らながらへてかゝる大御代の大御惠にあへるをなむ、天にあふぎ、地にふして、かしくみつゝ有し儘を、ありのすさひに短き筆の柄とりてしす。明治五とせの秋

壬生基修

歌

水邊夏月

秋風も底にやかよふ夜ふねさすたかせ涼しき波のうへの月

東久世通禧

詩

傑閣登臨夜色涼清風拂舞醉歌長千年只有當頭月空照中洲古戰場

丙申七月遊子信州長野矢島浦太郎延余其南樓款待備至樓梅高敞眺鴨之佳罕見其比一夜月明如午憑欄把酒吟興旺然則賜之以示

三條實萬

歌

祝言

まつりごと道なほかれとすへらきのをさめます世はいやさかゆへき

近衛忠熙

歌

竹雪

降るまゝにおもれるは落る音なしてふき折さかぬ窓のくれ竹

此則を海乃... 壬生基修筆
 此則を海乃... 壬生基修筆
 此則を海乃... 壬生基修筆

水邊 秋風も廣く
 其月 夕の影淡く

儂空登昨夜色涼清風拂推醉歎長子平
 只有常秋月空照中洲古戰場

丙申七月四日遊于信州長野至島浦言其長子其南樓故持備王釋孫高敏馳驅之宜

平其比夜月明如午畫樓把酒吟興狂然賦之以示 通瑞 田

祝言 海にありてはなるかな
 およびあはれはなるかな

升言 博愛の心
 此則を海乃...

嗟 峨 實 愛

歌

いつまでも色はかはらぬくれ竹のかけこそ君かすかた也けれ。

鍋 島 閑 叟

詩

時平壯士氣將窮。奮起誰圖列世功。回首當年知己在。欲乘萬里海南風。
航海無因奈志窮。慨慷常擬百蠻功。何當一變耶蘇教。都作細戈千足風。
右次瑞龍藤公征南詩。韵余幼時閱輿地圖。指豪斯州。歎謂人曰。此地空濶。可取而有也。今看公作心竊有感焉。故及之。

島 津 久 光

書

侍衛之臣。不懈於內。忠志之士。忘身於外。

山 内 容 堂

詩

遊鏡川舟中作。
小舟繫得清流處。人熱世界不知暑。看他漁父捕香魚。新獲何講細與巨。願呼同遊如耳觸。石卉湍亂人語。

嵯峨實受筆

山階宮家御所藏

嵯峨實受筆
山階宮家御所藏
此書乃嵯峨實受所書也

鍋島閑叟筆

侯爵 鍋島直大氏藏

時年世生海軍中將
國有當年
風 雄海軍
百戰功
物文士
此書乃嵯峨實受所書也

島津久光筆

公爵 島津定光氏藏

侍衛之臣不懈於內
忠志之士忘身於外

玩古道二書

山內容堂筆

長尾重名氏藏

此書乃嵯峨實受所書也
漁父捕魚
存如克耳

嵯峨實受筆
九筆九遊覽

久 我 建 通

歌

寒月照梅花

梅もさき月もくまなき空なからあたら此夜のさむくもあるかな

九 條 道 孝

書

琴書常自樂

中 山 忠 能

歌

梅 風

梅かかもあらたまりけりあら玉のさしのはつ風けさ吹しより

柳 原 前 光

送別曲木晒正、

故園路遙雲水連。綠蔭深處送歸船。瑞京風月鄂羅雪。回首追隨度二年。

寒月
照梅花

梅は十月の月とて多かりしを
あいらびの空にても有る子
建通

琴書常自樂

道孝


九條道孝筆

藤井祐敬氏藏

梅風

忠能

中山忠能筆

梅のつとめは
老よりあはれなる

と
風

斗
風

斗
風

青木恒三郎氏藏

光前柳氏藏

藏氏秀木曲

何國故は是も水連縁無
夜送帰船瑞香月
羅香回追陽後二年

送別
曲木子西正
北極原秀先中

池田慶徳

祝

たみやすく國ゆたかなる君か代に出あふ身こそうれしかりける

前田慶寧

忠

安政四年、歳次丁巳、長夏上浣、做顔法

事其君者、不擇事而安之、忠之盛也、

孝

事其親者、不擇地而安之、孝之至也、

加越能三州太守、三位黃門菅原齊泰、

鷺尾隆聚

書簡

陪觀人心得書

番組

右御送附候間、御落手被下度候也、

三月七日

華族會館御中

伊達宗城

書簡

適體之候、愈壯榮愈賀候。陳ば兼而希置候、天涯比隣帖、揮毫之事、每度申乞候得共、

御多用中不被得閑時、無止候。乍去天涯比隣も飛散に及而は、折角急せ候記念之

帖故遺憾不少、就而は一旦御返却申受度尙期、面盡候得共、此旨申述度、如斯候也、

十月廿日

宗城

重野 兩先生几下
巖谷

尙成齋先生へ云、末廣より願入候遺稿も、如本文一應御返却希候也、

毛利元徳

朝廷今日之御衰運、痛哭に不堪也、多年の微志、何日に貫候半哉と、苦慮此事に候、汝
可思之、

池田茂政

寄松祝

ちよふとも色はかはらしいつまでも君か齡は若のうら松

池田慶德筆

伯爵廣澤金次郎氏藏

祝

返愛海

平山やまぐり

五月廿一日

前田慶寧筆

侯爵前田利爲氏藏

忠・孝

忠四年歲次丁巳夏上流閣法
 車其君者不擇事而
 安之忠之盛也
 車其親者不擇地而
 安之孝之至也
 加藤三州太守五位實門督原青木藏

藏氏那一爾野重

池田茂政筆

信成りりる
 ちり
 りりりりりりり
 りりりりりり
 ちりりりりりり

筆 聚 隆 尾 鷲
 藏 氏 郎 三 恒 木 青

筆 城 宗 達 伊

伊達宗達筆
 謹啓
 先賢の徳を慕ひて
 修身養性
 志を立て
 事を行はば
 功を立すべし
 此の徳を慕ひて
 修身養性
 志を立て
 事を行はば
 功を立すべし

十月廿一日

若菜寛下
 此の徳を慕ひて
 修身養性
 志を立て
 事を行はば
 功を立すべし

筆 德 元 利 毛
 藏 氏 昭 元 利 毛 爵 公

朝比野元康
 運路界内也
 多平一休志同
 田原元康
 三男

池田侯爵家藏

あよぬとよ毛の
 君の徳の著け
 松茂政

德川齊昭
藤田東湖合作

瓢兮歌
瓢兮々々吾愛汝。汝嘗熟知顔子賢。陋巷追隨不改樂。蓋將美祿延天年。天壽有命非汝力。聲名猶附驥尾傳。瓢兮々々吾愛汝。汝又嘗受豐公憐。金裝燦爛從軍日。一勝加一百且千。千瓢所向無敵。叱咤忽握四海權。瓢兮々々吾愛汝。悠悠時運幾變遷。亞聖至樂誰復躡。太閤雄圖何忽焉。不用獨醒吟澤畔。只合長醉伴講仙。瓢兮々々吾愛汝。汝能愛酒不愧天。消息盈虛與時行。有酒危坐無酒顛。汝危坐時吾未醉。汝欲顛時吾欲眠。一醉一眠吾事足。世上窮通何處邊。

高島秋帆

失題
萬綠擁孤峽。春歸花白妍。日斜苔壁冷。雲重石橋偏。一水清無暑。數峰青可憐。巖煙飛不到。合是此山中。

江川坦庵

書事
君思難報淚潛々。自知不敏愧生顔。何逐片舟五湖月。悠然獨覓一身閑。

佐野竹之助

題しらす
思ひきや今のうき身は敷島の
大和心の露の魁

有馬新七

右高山正之送其祖母并伯母之手跡而予所獲之於土浦藩士長島氏者正之雖不巧書其遺墨之僅存在人必敬重珍藏之而如此書尤足以見其孝敬之誠在孰不敢敬重乎夫古人之手跡所以見重於天下後世者豈不以其人乎(以下略)

宮部鼎藏

書拓本小楠公決命詞後
小楠公之忠孝至誠。貫日月泣鬼神。使天地間一大正氣。扶植於冥々中。胎出天下萬世者。固無論已矣。爲人臣子者。孰不敢體其志。敬其身乎。故安政紀元七月。余游大和。出古埜觀其鏃書決命詞。遂摺寫以歸。將製扁額而事務紛冗。未果也。頃有故屏扃無聊中。追想昔遊手製扁額一面。揭出壁上。寶愛敬奉。且以解悶。吁嗟。余近日憂慮百端。神氣不能旺然。至忠孝大節。矢不背公之志也。安政丙辰仲秋八日。宮部增實敬題



德川齊昭 藤田東湖合作
 伯 爵 香 川 敬 三 氏 藏

高島秋帆筆 寺内伯耆家藏 佐野竹之助筆 大國恒太郎氏藏

高島秋帆筆
 日斜 苦暑冷中宜不搖扇
 一水信寄至數峰 青子懷
 香煙花影到 常是此山川
 享子晚香月 志在秋風圖

江川坦菴筆 江川英武氏藏

不思親報淚借 自古不
 叙愧滿顏何逐身再 湖
 月無從獨覓一身因

有馬新七筆 柳山伯耆家藏

右高山之遺文祖母伯母之子 隄而平所撰 於上清落古書
 次者之正之體不巧書文遺事 他存人少故言故藏之於此 古書以
 足又考徵一輪九九不致致中夫百人少故所不見有於天之後世無不
 以又人少其 宜宜不振其不相之休心之情以 南朝書定
 高惟懷惜大心一匹夫周遊四方旋然不賴身與矣 宜宜歸
 行國乃之任登石之望傳相字 於天 嗚呼亦傳矣其言其體
 惡苦仲連為人而也 美道身教無十 志致之於道於仲連子志夫
 宜我其志 信厚者為人 可致守此道重守子 他身而於行一也 柳巖不於乃
 所以垂天人之後 起者正其志以 聖教 宜宜上之六美乃於其言
 正而正其志 宗澤及而相人之實 又未始有愧其兵比而可消其夫上
 贈以書之 東山居士圖畫圖書文後開者許以書於焉 己未月藤田東湖書

忠孝之今乃
 之志也
 大忠の玉の勳

宮部則廣筆 宮部家藏

小楠公之志孝至誠貫日月
 泣鬼神使天地間一大正氣
 扶掖於異中艱出於下萬
 庶者固贊備已矣為人臣子
 者孰敢輕其志哉其身予
 或安政紀元七月本建大和
 止吉登觀其錄書決命詞蓋
 擢焉以歸於製扇願而更務
 紛尤未果也頃有故屏履與
 研中追想昔遊午製扇願一
 面獨出壁上賣愛敬事且以
 問吁嗟余近日憂慮百端神
 氣不能壯然至忠孝大節矢
 不肯 公之志也

安政丙辰仲秋八日 宮部增實敬題

藤田小四郎

小四郎筆豫讓圖

武田耕雲齋

勇敢強有力者天下無事則用之於禮義天下有事則用之戰勝

耕雲書

有村雄助

歌

日の光りてゐる御代もかなおく山の紅葉もいまは散てつくさむ

有村次左衛門

歌

櫻田の時に詠める

岩金もくたけさらめや武士の國のためにと思ひ切る大刀

大關和七郎

當其貫日月生死亦足講

大關増美



武田 田丸 田丸 田丸 田丸
 田丸 田丸 田丸 田丸 田丸

勇放強有力天天下
 用之抄禮義言心
 則用之戰勝

藤田 小田 四郎 筆
 有池 晋二 氏藏 (右)

さきと日のまをさし成り家々
 下よりあはれこころをさし成り家々

有村 雄助 筆

伯野 香川 敬三 氏藏

志をたてし心をたてし武士
 國はまのくにをさし成り家々

有村 次左衛門 筆

有村 國太郎 氏藏

當其 碩日 朔
 生花 在庭 繪

大關 和七 郎筆

高階 幸造 氏藏

甲子初め
先帝揚兵勝国信



勇故強有力天下重宝
用之於禮義之心事
則用之戰勝

勇故強有力天下重宝
用之於禮義之心事
則用之戰勝

源四郎川藤
右殿氏一書

さきと日のまをみし成り家にて
よきことありしはさきと日のまをみし成り家にて

竹野 香川 氏 藏

忠臣の心をみし成り家にて
よきことありしはさきと日のまをみし成り家にて

右殿氏一書

奮其 碩日 綸
生宛先 大澤 氏 藏

右殿氏一書

武市半平太

白晝白讀

横井小楠

塵俗萬緣付水流種蔬拂草不知憂閑來總隨老農事一種難忘七道州

巖谷一六

書簡

辱貴价殊に御國石決明之賜千萬奉感謝候。猶拜顔御禮可申上候得共、不取敢御請迄如此候。御所勞折角御自重專一奉祈候也。草々頓首。

第一月廿日

巖谷

修

澁澤先生

侍側

小松清廉

書

松陰鳴鶴 庚午春書於浪華寓居 觀瀾小松清廉

玉乃世履

書簡

貴翰拜見仕候。先日受取申候御起草書寫取濟次第返上可仕候旨拜承仕候。寫相濟次第ニ差上可申候。將又原告人江達之儀は、右清寫出來候上相運ひ候心候ニ御座候間、兩三日中と思考仕候。其節は御報告可仕候。彼是貴酬迄、如此御座候也。拜具。

十一月九日

玉乃世履

ロベルトジョンヒートン殿

拜復

轟 武兵衛

宮部増實傳の一節

途涉芳野登金剛山。搜南帝楠氏之舊趾、遂遊江戶。見山鹿氏之孫素水者、素水時著練兵實備先生與長州吉田寅次郎爲之序跋。有鳥山新三郎者、儒爲業。沈勇有膽略。寅次郎與南部江畑五郎、寓新三郎之家。(以下略)

松陰鳴鶴

松陰鳴鶴
卷一
一、松陰鳴鶴
二、松陰鳴鶴
三、松陰鳴鶴
四、松陰鳴鶴
五、松陰鳴鶴
六、松陰鳴鶴
七、松陰鳴鶴
八、松陰鳴鶴
九、松陰鳴鶴
十、松陰鳴鶴

松陰鳴鶴
卷二
一、松陰鳴鶴
二、松陰鳴鶴
三、松陰鳴鶴
四、松陰鳴鶴
五、松陰鳴鶴
六、松陰鳴鶴
七、松陰鳴鶴
八、松陰鳴鶴
九、松陰鳴鶴
十、松陰鳴鶴

唐何遜梅村五子種疏
一、松陰鳴鶴
二、松陰鳴鶴
三、松陰鳴鶴
四、松陰鳴鶴
五、松陰鳴鶴
六、松陰鳴鶴
七、松陰鳴鶴
八、松陰鳴鶴
九、松陰鳴鶴
十、松陰鳴鶴



松陰鳴鶴
卷三
一、松陰鳴鶴
二、松陰鳴鶴
三、松陰鳴鶴
四、松陰鳴鶴
五、松陰鳴鶴
六、松陰鳴鶴
七、松陰鳴鶴
八、松陰鳴鶴
九、松陰鳴鶴
十、松陰鳴鶴

松陰鳴鶴
卷四
一、松陰鳴鶴
二、松陰鳴鶴
三、松陰鳴鶴
四、松陰鳴鶴
五、松陰鳴鶴
六、松陰鳴鶴
七、松陰鳴鶴
八、松陰鳴鶴
九、松陰鳴鶴
十、松陰鳴鶴

吉田松陰

寄森田節齋書

前夜之誨言々語々徹胸衝心。然僕犬馬戀主之心區區無已。是以不能從高誨也。僕志已決矣。不復謁於先生也。且今朝遣梅田源二郎。細聽京師事情。因憶謁南陽公拜堤卿。非僕之急也。但當日夜星行。致力關東耳。明朝將發。作鄉書甚夥。雖欲謁先生。亦無暇也。僕死且不避。亦何恐先生之怒罵乎。

癸丑十二年七日

吉田矩方再拜

節齋森先生座下

拙詩二篇錄在別幅。飄然而去。河山千里。再逢難期。鄙誠之所注。寄在二首焉。
山河襟帶自然城。東來無日不憶神京。今朝盟歎拜鳳闕。鳳闕寂寞今非古。空有山河無變更。野人悲泣不能行。聞說今皇聖明德。敬天憐民發至誠。鷄鳴乃起親齋戒。祈掃妖夷致太平。從來英皇不世出。悠悠失機今公卿。人生如萍無定在。何日重拜天日明。

梅田雲濱

心大則百物皆通心小則百物皆病

雲濱

橋本左內

題圖

兩箇魚籃一釣絲。坐來秋水澹雙眉。欲投香餌沈吟久。默俟萍開風起時。
家在黃楊落照邊。前臨流水後桑田。休疑鶴髮塵清絕。山雨溪風五十年。

高輪竹杖。

漁火遙々小似星。暗潮作響響沙汀。白蝦紫秋光老。買醉人多在水亭。

世之君子，神、德、贈、勳、公、然、
 犬、與、應、王、心、已、無、已、是、以、不、能、
 而、神、也、心、已、不、次、矣、不、後、揚、
 生、也、五、今、期、逆、梅、田、酒、一、如、
 解
 宋、師、重、情、因、信、揚、亦、揚、公、
 次、御、車、信、之、志、也、但、當、日、夜、
 星、行、致、力、湖、東、身、明、朝、
 貴、作、外、官、甚、敢、報、
 先生、志、無、暇、也、但、元、且、不、
 避、亦、何、
 先生、之、然、也、
 慶、長、十、二、月、廿、吉、吉、田、
 希、希、在、先、生、
 拙、稿、二、第、初、立、別、幅、僅、
 而、去、河、山、多、已、再、進、雖、
 神、之、可、也、亦、至、二、百、也、

山河襟帶自悠悠
 東來不日快
 神宗今朝與歌伴
 風調野人耕種不
 能行團說
 今皇至明法無天
 憐瓦殿至誠德
 乃親親貴或村禪
 故考致太平往未
 英皇不知德、夫
 播分公卿人坐此
 薄如定至何日重
 轉
 天日明

藏氏郎三直集賢 筆陰松田吉

心大則百
 物皆通
 尔息石
 物以類
 重價

梅田雪濱筆 山田倉太郎氏藏

橋本左内筆

加藤 敏氏藏

題圖

兩箇英籃一釣絲
 坐來秋水澹雙眉
 款投香餌沈吟久
 點俟以萍洄風起時
 家在黃楊落照邊
 前臨流水後桑田
 休疑鶴髮塵清絕
 山雨溪風五十年

高輪竹枝

渙火遙、小似星
 暗湖作響雷
 沙汀白

蝦菜鱗杖光老買
 醉人多在水亭

秋日寓居雜題

霜葉聲乾秋已衰
 客中懷抱枕頻歌
 夜來窓外啼蛩雨
 杜洲五更殘夢時

佐久間象山

おもひをのふる歌
日のもこの、やまこのくには、かけまくも、あやにかしこき、閑みろきの、かみのみ
よ、梨、たかしらす、あまつひつきを、あめつちご、日月ご裳に、ごをなかく、よろ
つちあきに、すめろきの、しまますくにご、たちむかふ、忍みしかごもを、はきよ
め、むけたひらきて、あを雲の、たなひくきはみ、しらくもの、むかふすかきり、く
にはらは、うまたてつらね、うなはらは、和ねみてつ、け、あめのした、くにつちか
らを、もち月の、たはしてむご、おほけなく、みをもおもはず、つきに日に、心つ
くせしを、萬かつひの、かみのしわか、ゆくみちの、いくらもあらで、みちまけに
つますきしつ、つみをさへ、おひてしあれご、いしこそは、まるひもすめれ、くさ
こそは、なひきもすれ、すめろきの、みかとのためご、ますらをの、布りおこしてし、
まこゝろは、いのちのかきり、いしのごえやまろはむ、くさのごえやはなひかむ、
あめつちの、おほみかみたち、しなぬのおほくに、みたまごさしくに、あまつみそら
ゆ、あまかけ利、見そなはしてよ、わかしつこゝろ。

梁川星巖

和歌

をりにふれて
千早振神の御國の磯あらし
吹ごもしらてよするえみし良
阿那ごふご濁れる世ごはなりぬれご
みなもご清き加茂の川水
海山も民もろごもに安かれご
祈まごごをあまてらすらん
太刀はきてゆみやごる身も愧ぬらん
我か大君のたけき御こゝろ
七十自吊
老そます人もおのれも草木まで
ひまゆく駒にひかれへて
老はてゝ終る命はそおしからじ
世にいさをしのなきかなしき
春の野にて詠る
春の野に賤つかむ菜のわかみごり
おもひや出ん去年の面かけ

雲井龍雄

詩

飄零贏得飽江山。又泊東寧萬里灣。報國壯心丹一掬。寄身寒水碧雙環。功名蠻雨瘴煙外。踪跡馬聲帆影
間。猶有秋風蓬底夢。依稀夕向故園還。沙界灣夜泊

山田清久

Over

Handwritten text in Kuzushiji script, likely a letter or a collection of notes, starting with '山田清久' and continuing with several lines of cursive writing.

梁川星巖筆

Handwritten text in Kuzushiji script, starting with '山田清久' and continuing with several lines of cursive writing.

雲井龍雄筆

永井道吉氏藏

Handwritten text in Kuzushiji script, starting with '山田清久' and continuing with several lines of cursive writing.

山田清久

中山忠光

夷狄良と友に東夷茂たをさねば

い嘉て御國のけかれすゝかん

吉村寅太郎

重三前一夜回翠樓訣別書懷

櫻樹未開楊眼嬌。決心呼友酒終宵。一家一國足焉患。宜使本朝爲本朝。

平野國臣

天津風ふくや錦の旗の手に

なひかぬ草はあらしこそおもふ

美玉三平

みよしのゝ山よりやまにふりつゝく

ゆきにかけるふたつはるをまで

高橋甲太郎

常盤女携三兒奔圖

雪撲笠擔寒刺肌。左提右携僅逃危。誰圖佗日成龍虎。慶殺平軍此是兒。

中山忠光筆

時田光介氏藏

夷狄良と友に東夷民たき候
美て洋国のけりれすらん忠光

吉村寅太郎筆

川田豊太郎氏藏

櫻樹在園楊眼端決心乎
太海終宵一衣一國為
志軍使本精為本精

園下沈美本
吉村寅太郎筆

櫻樹

平野國臣筆

吉井 達氏藏

三月内
三月内
三月内

美玉三平筆

吉井 達氏藏

三月内
三月内
三月内

高橋甲太郎筆

吉井 達氏藏

雪横美格
雪横美格
雪横美格

吉村寅太郎筆

吉井 達氏藏

眞木和泉

天の戸の明行まゝにすか／＼し
はるや神代に立かへるらむ

永井介堂

文

書累卵帖之後

居治而思亂、可以保其國、膏粱不忘藜藿、可以克其家、安危無端倪、禍福如糾繩、人能知累卵之危、則可全磐石之安、語曰、其亡亡繫于包桑。

久坂義助

七卿落都落歌謠

文久三年八月十八日、おもふことありて、この舞曲をうたひつゝ、都をいて立侍る。
世は刈薦と亂つゝ、紅さす日もいとくらく、蟬の小河に霧たちて、隔の雲となりけり、うらいたましや
靈きはる、大裡に朝暮殿みせし、實美朝臣季も卿、壬生澤四條東久世、其外錦小路との、今うき草のさ
ためなき、たひにしあれば、駒さへもすゝみかねては嘶つゝ、ふりしく雨の絶間なく、なみたにそでのぬ
れはてゝ、これよりうみやまあさちかはら、つゆしもわきてあしかちる、難波のうらにたくしほの、から
きうき世はものはこ、ゆかむとすればひかしやま、みねのあきかせ身にしてみて、あさなゆふなきゝな
れし、妙法院の鐘の音も、なんど今宵はあはれなる、いつしかくらす雲霧をばらひつくして、もゝしきの
みやこの月をしめて給ふらむ。

大橋納庵

思誠堂日記

廿六日雨	朝須伊使來 <small>遺四郡五部 元寇三部</small>	○午後制本屋來 <small>致同郡 二十部</small>	高杉晋作	
廿七日雨	朝家嚴之元濱町	○午後無事	○夜高久氏來	大橋燾次
廿八日陰	朝先生之于高久氏	○雨森三藏來 <small>津輕人</small>	○午後燾次君使于元濱坊	○夜要玄保
廿九日晴	之昆氏	○表紙屋致 <small>表神二 百枚</small>	高杉晋作	
朝雨森三藏來謁	○晋作之于上邸	○午後要玄之昆氏	○燾次之萬忠	○泉吉使
來 <small>遺小言 五部</small>	○杉浦君使來	○荒井金次郎來謁	大橋燾次	
三十日陰	朝栗原啓太郎來謁	○午後高橋氏使來	○家君講中庸	常盤文吉
太郎君來聽	○夜無事		森冬藏	清水磯

伊藤甲之助

春雨の早く降ける頃水上山に在て世の事を思ひつけて
春雨の音もわひしき山の端に、侍はごほき花のころかな

王社乃... 乃... 乃...

永井介堂筆

千葉立道氏藏

居治尚思亂... 保國常果不志... 萬石...

大橋訥庵筆

大橋鶴太郎氏藏

世は... 乃... 乃... 乃...

久坂義助筆

久坂秀次郎氏藏

Table with 2 columns of handwritten entries, including dates and names like 久坂秀次郎, 高杉晋作, etc.

伊藤甲之助筆

伊藤 藤氏藏

Vertical handwritten text on the left side of the page.

河井繼之助

書簡

損毛達し委細郡野より被廻吳掛る大變有之候に、何ニ御爲に成る事も不出來は畢竟平生才德之乏數と天命之あるところ、無致方事ながら、殿様は誠に御氣之毒に奉存候。扱又此度之水變は不及申、其外平生之事始、近親衆吉凶に至る迄、必御兩親様之御苦勞に相成候は、誠に子之體には不幸にも可相當、御隠居も被遊候物を掛る次第、實以恐入候得共、今暫御免被成下、不才之私免ても何ニ出來る程之事も無之候得共、少は人間がま敷罷成拜願仕度、其而已祈念仕居候。尊書を拜見仕候ても、獨居靜に考候ても、此儀は實に念頭にたいす、何卒他日歸國之節、只今徹し候心地を不忠穢に仕度物に御座候。是等の變を聞ながら、遊歴等は不似合に候得共、思ても無益あきらめ候次第、不忠とや云はん、不孝とや云はん、唯々他日己之誠心を以て、只今御間を缺くを、萬分の一にても報じ、罪をあがなへ度と奉存候、何につけても、己之不才不學未熟には、未々不頼敷、殘念に御座候。家を出てより何一つ上達も不仕御はり合も無之事、申譯も無之候得共、致方も無之、せめて心だけでも直し度と願儀に御座候。山田先生え、差足事を不致に唐敷と思はるさらさの小手今日貴候。先生始一家深切、且先生は、私には至而藥之様に被存難有事に御座候。又々書始終々々いくじもなく、如此に相成候、御慰にも相成間敷候得共、御覽可被成下候謹言
同夜認
惣而之書狀御咄は、御取捨可被成下候。申上に不及事なぞも、爲念に申上候。此は繼之助が、江戸の山田方谷の塾に在りて、郷里長岡なる父に寄せたるものなり。

村田清風

青年のむかし吉原の驛にて不二山を見てよめる
来て見ればさくより低し不盡の峰
釋迦も孔子もかくやあるらん

清川八郎

題しらす
よきおろせ不二の高ねの大御風
よもの海路のちりを攘はむ

櫻田良佐

送義舉倡始清川君
孤劍漂然征衣新。海山萬里極遊巡。莫道當今無管樂。攘夷策應頼此人。
癸亥春櫻田迪六十七

高杉晋作

蜀魂

きれて呉れろこやわらかに、真綿で首のこわ意見八千
八聲の蜀魂血を吐くよりもなほつらい

出雲町居候郎

坂本龍馬

かの小野小町が名歌よみても、よくひてりの願のよき時は、うけあひ、雨のふり不申、あれは
北の山かくもりても、左右を内々よくしりてよみたりし也。
にたつただ、つねの太刀をさめて、しほの引しも、しほ時をしりての事なり。
天下に事をなすものは、ねぶともよく、はれずては、はりへはうみをつけもふさす候
おやべごのは、早子ができたなご、申人あり、いか、私しがい、よるごいうておやり、か
しく。

六月廿八日

龍馬

おごめさまへ

此手かみ人にはけして、見せられんごよ、かしく。

前原一誠

書簡

御米銀遣拂之儀に付而は、御伺之義問近く、御法則被仰出も有之候處、不得止勢相見候に付、莫大之御費ごは
奉存候得共、米を以企救郡中御救助被仰付候段、從山々御沙汰有之候段に付、私見切を以不取敢於出先
取斗仕候、此段深奉恐入候、且又將來萬一御國中御法度之敗れごも相成候而者、殊更不相濟、大罪奉恐入候、依
之身柄差控待罪罷在候間、被成御沙汰可被下候已上。

卯十一月

前原彦太郎

江藤新平

手簡

拜啓時下倍御清穆之筈奉拜賀候、然者、近來者別而御疎情打過候付、今朝ハ御尋仕候處、最早
御參朝後ニ相成就而ハ今夕ハ池ノ端小樓ニ而御面會申上度奉待居候付、御間隙モ候ハ、
御退公より御來臨奉願候、一二ノ花モ取寄候手配仕置候間、未々人目ヲ欣ニルト否ト者難
期候得共、艶然滿枝ト人ノ噂ニハ御座候、兎角拜姿縷々可申述、先者早々不宣。

第十二月廿日

土方盟臺

江藤新平

文讀し其方也也本局乃其神文
 昔此山由是見八中ハ有リ日有魂
 此山ハ其利也古有傳ハハ
 〇十四日自領



高杉晋作筆(右)
 山根正次氏藏
 坂本龍馬筆(上)
 田岡正枝氏藏
 前原一誠筆(左)
 青木恒三郎氏藏

六月廿八日
 〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇

高杉晋作筆(右)
 山根正次氏藏
 坂本龍馬筆(上)
 田岡正枝氏藏
 前原一誠筆(左)
 青木恒三郎氏藏

江藤新平筆(右)
 土方久元氏藏

島義勇

詩

偶書三首

守官久不出城門暇日逍遙後樂園在々觀來此中物一花一草亦皇恩
我原西海一狂人誤舉顯官列大臣當日富貴過素願每逢特遇想雙親
一榮一辱焉足憐不怪後進代執權都是邯鄲枕上夢讀熟范睢蔡澤傳

川路聖謨

書簡

官船箱館丸御直產物積入御地爲差登候ニ付寸楮拜啓仕候殘炎之候先以被爲勝倍御勇
健被爲涉拵賀無量ニ奉存候次ニ僕儀も不相替碌々瓦全乍恐御休憐可被下候然者坂兵
會所も追々御厚情ニ而折合候趣不堪感銘奉存候尙此末御庇蔭之程伏而奉希候併本年
者昆布生者不宜候ニ付荷物不足其上外船商人殊之外懇望仕候故價も格外ニ沸騰仕候
故定而其御地江廻リ方相減嘸々難澁可申出哉遙察仕候へ共勢不得已候駢者相應之
漁事有之候故昨年トちがひ肥類は多分海運可相成候間農人喋々之說者相消候事哉ニ
相考申候

追々諸蠻入津貿易も御取開相成候處種々混雜仕殊更貨幣屢命令相改別而諸引合差支
不尠殆ど當惑を極申候いまだ何事も折合不申日々痛心罷在候嗚呼いつの時歟旭之旗
章萬國ニ輝候様可相成歟と夫相祈申候何も俄ニ御船出帆申出候間不取敢時令奉伺候
迄如此ニ御座候拜敬頓首
七月十六日

三郎太郎花押

山城守様

猶以時下折角御自重被爲在候様奉拜祈候
兼而相伺候九谷義いまた相成不申此はご又々様子承り候得共又々相生ニ而被用居機
屋重寶故他國不致候様喰留居候趣ニ及承申候乍去當人は是非下り度ご存候様子ニ相
見候趣ニ及承申候
一此鹽數子風味如何哉難斗候得ごも便船ニ任せ御一笑までに奉呈上候呵々御取捨可被
成下候敬拜首

丸山作樂

第一 御祖父様 御祖母様 又 御母様 大切 致 皆様
ダイイチ、オチーサン、オバーアサン、マタ、オツカサン、ヲモ、タイセツニ、イタシ、ミナサンノ、カ
可愛 餘
アイガル、アマリニ、スネタリ、アマヘタリ、モノヲホシガツテ、ナニヲ、オクレ、カヲ、オクレ、ナド
ト、ネダリゴト、イタシ、オセワラ、ヤカセス、ヤウニ、イタシタク、ボウモ、トシハ、ユカホド、マル
山 作樂 一人娘 世 通 子 振 大
ヤマノ、サクラガ、ヒトリムスメ、ナレバ、ヨノヒトトホリノ、コドモノフリニテ、オホキク、ナリテハ
ハヅカシイワケダ、(以下略)此は明治十年、作樂が長崎縣監獄に在りて、我が女に與へたる手書なり

守官不出 城門閉 日逐清涼園在
 觀其於中物一花二葉 白惠 五葉西海
 一担人保容願官到本臣官自高貴還去願不逢
 特選機變親 一乘二年高情不恨清美代執
 雄於其許那地 上多請慈范雅其澤傳
 偶書三首 雜詩五首 五言律十首

島 義男筆(右)
 大野男太郎氏藏

此詩之佳處在
 其意之入於心也
 其情之動於人也
 其理之達於事也
 其法之妙於法也
 其味之醇於味也
 其氣之清於氣也
 其神之遠於神也
 其韻之長於韻也
 其聲之清於聲也
 其色之白於色也
 其香之清於香也
 其味之甘於味也
 其性之柔於性也
 其質之實於質也
 其理之明於理也
 其法之妙於法也
 其味之醇於味也
 其氣之清於氣也
 其神之遠於神也
 其韻之長於韻也
 其聲之清於聲也
 其色之白於色也
 其香之清於香也
 其味之甘於味也
 其性之柔於性也
 其質之實於質也
 其理之明於理也

山城十稿
 此詩之佳處在
 其意之入於心也
 其情之動於人也
 其理之達於事也
 其法之妙於法也
 其味之醇於味也
 其氣之清於氣也
 其神之遠於神也
 其韻之長於韻也
 其聲之清於聲也
 其色之白於色也
 其香之清於香也
 其味之甘於味也
 其性之柔於性也
 其質之實於質也
 其理之明於理也

丸山 作樂筆(左)
 丸山正彦氏藏

大崎縣監獄
 此詩之佳處在
 其意之入於心也
 其情之動於人也
 其理之達於事也
 其法之妙於法也
 其味之醇於味也
 其氣之清於氣也
 其神之遠於神也
 其韻之長於韻也
 其聲之清於聲也
 其色之白於色也
 其香之清於香也
 其味之甘於味也
 其性之柔於性也
 其質之實於質也
 其理之明於理也

川路聖謨筆(上)
 東京帝國大學藏

三條實美

書簡

要用以略札申陳候。於禁中別席にて相談候而も宜候得共、嫌疑も有之候間、大概禿筆を以て、密々申入候。昨日も同勤より談話有之候。民部大藏之義、誠に今日之急務至要之事件ニ有之候。昨夜來も情相考候處、小生見込は別に無之候。大隈氏を參議ニ登用、民部大藏之義も、當分掛り被仰付候ハ、政府と民部之情實も相通じ、有力之人材、廟堂に有之候時者、自ら政府之權力も強く相成、偏重之憂無之、旁兩方之御爲にも可相成候。尤此義、小生之獨論にも無之。追他人之説も符合致候間、如此相成候はゞ、稍弊害を除き、物議を鎮ムル之道に可有之と々存候。元來大隈伊藤兩士之義は、頗有材有識、又有力難得之英物、大に頼もしき人に有之候處、惜哉才英敏に餘有之候て、人を籠絡し、權謀術數に近く、溫和之氣象、包容之度量無之處より、自然誹ヲ來し、今日之物議も有之候事に付、決而他に可疑事も無、可惡事も無之、實に可愛之人也。然處大隈を參議に用ル事、副島にも稍異論に似たる氣あり、小生疑ラクハ小生が大隈ヲ參議ニ舉ること、副島ニは若は大隈ニ疑念有て、當官を免じ、參議に轉スル之意也と思ハン歟。此處小生未論彼スルコト如何と思惟致候也。足下いかゞ、小生之大隈ヲ舉ルハ、決して疑念アルニ非ず、衆論ニ從ヒ、材力之士ヲ政府ニ舉げ、民大之權力ヲ政府ニ收攬スルニアリ、且は天下之怨瀆ヲ民部ニ獨不歸して、善惡共ニ政府ニ擔當スルニアリ。此義岩副廣三氏も同意ナラバ、大久保ニ在テ異論も不可有歟。小生愚按、此策ヲ捨テ他ニ良策ナシ。不圖も足下之論、小生之見ニ符合ス、仍而聊鄙見ヲ以て足下ニ告、猶考慮之上、合論ニ可至周旋有之候はば幸甚也。猶後刻面上可申陳候得共、參朝之上、他人ヲ避、別坐之内談ハ、頗醜態に有候間、態と以書簡、大概愚論申入置候也。不寧

二月廿三日

實美

佐々木參議殿

至密

四條隆謨

書簡

彌御安康珍重存候。抑近比誠ニ御苦勞ノ義申願兼候得共、先願試候來十九日小番三番詰宿等爲、譯番代御參之義相成申間敷、無據用事出來、令番代度存候。若し御差支も不被爲、在候はゞ、何卒御同心御參給候はゞ、彌々畏入存候。尤御返番ハ何時にても可相勤候條、必々無御遠慮御答ニ御示可給候。右參上可相願、本意ニ候得共、却而御面働と存候間、乍略儀以書狀申願試候、仍早々如此候也。

十月十七日

隆謨

東坊城太夫殿

大原重徳

書

本來無一物

集議長官益壯源重徳應需書

岩倉具視

書簡

過日来毎々御書狀忝存候、昨日松岡及、示談候所、何分同藩之事、左院中云々之次第も有之候間、副議長え申聞
吳候様この事ニ候、尤副議長より示談候は、松岡ニモ必心配可致この事に候、然るに伊地知出仕、來月三日
四日比ナラデハ六ヶ敷旨、同人申居候、左候へば、松下發途之時日ニ可、至ニ付、近頃殘心存候、小生には民情之
事深く注意有之候事故、内務官可然存候得共、大久保留守中、少々都合惡敷ニ付、貴卿土方、中村邊御内談
ニ而、正院中文學上ニ關し候所え、御登用如何と存候、松岡にも或は右邊と申居候、尤無御異存候は、小生よ
り土方え可、申聞候得、何分餘日無之今日は休日、旁前條申入候、條御勘辨可被下候。

江藤も終に高知縣え進去之趣、如何御考に哉、小生には板垣には、毛頭懸念無之候得、其以下の中、必死ト
ナリ保護致し候者なし、難申カ、亦知郡人に萬一被計候事もなく、ヤト苦慮候、昨日伊達宗儀卿咄しに、過
日細川スミノ助ト名乗、七名計之從者ニ而、宇和島へ來り、士族煽動の由、其人体富永ユウリン、長脫人之旨、正
に申越トノ事ニ候、彼是落合如何ト存候、御見込ニヨリテハ、速ニ御手廻し無之而は不相成と存候、御舊縣之
事ニ付、貴所は勿論河原塚にも、百方盡力致、決而卒然ノ事は有之間敷と存候得共、佐賀變動事件、江東一人捕
縛さへ相成候へば、首尾ヲ取り候譯ニ付、決而小事に無之十分御注意ニ而、木戸氏えにても御斗り可給か、此
段一筆申入候、草々以上。

四月一日

佐々木殿

具視

近衛篤磨

書簡

炎暑之候ニ向候處、益御健勝奉、賀候、却說貴家之老女として、維新前勤王之爲盡力致候村岡之ために、其遺族六
條定光^{日下繪當家ニ}勳^{日下繪當家ニ}諸名家之詩歌ヲ蒐集致し居候就而、尊君にも相願度趣にて小生ニ其紹介ヲ依頼致候間、此
段申試候、御承諾被下候得者、當人之喜不^レ過之と存候謹言。

六月廿六日

丸山作樂殿

近衛篤磨

姉小路公知

送別

故郷にかへる錦の袖の上に
つゝめや君か深き恵を

大原重徳筆

木来望丁物

青木恒三郎氏藏

嘉禧年七月廿三日大原重徳書

運月来丁物は
 伏見の町に
 有るものなり
 是れを以て
 木来丁物と
 名づけられたり
 其の由は
 昔の事なり
 伏見の町に
 有るものなり
 是れを以て
 木来丁物と
 名づけられたり
 其の由は
 昔の事なり
 伏見の町に
 有るものなり
 是れを以て
 木来丁物と
 名づけられたり
 其の由は
 昔の事なり

姉小路公知筆

武市牛太氏藏

古所小人の為成の袖は
 伏見の町に有るものなり
 是れを以て木来丁物と
 名づけられたり

岩合具親筆

侯爵木行忠氏藏

此の由は
 昔の事なり
 伏見の町に
 有るものなり
 是れを以て
 木来丁物と
 名づけられたり
 其の由は
 昔の事なり
 伏見の町に
 有るものなり
 是れを以て
 木来丁物と
 名づけられたり
 其の由は
 昔の事なり

近衛篤磨藏

丸山正彦氏藏

木戸孝允

書簡

拜呈
孕雲謹而奉敬誦候、昨夕勝拜謁仕候節、大義御示諭、彼謹而敬服仕候次第、偏に御誠意之徹下仕候處と、難有奉感佩候、今朝大久保罷越勝直々相談候て、尙又可然、大久保決而疎は無之事と奉存候、此度之御都合に御座候得ば、對世間候ても、稍安心仕箱館之事至鎮定候て、慶喜におゐても、世上に面目相立、是まで真に微誠有之、會桑等之爲に壅塞され居候事に御座候得ば、此度之實行におゐて、真に微誠も相顯れ、千載に其名を洗ひ候次第、是又朝廷之御大仁、相公之御公照より出候事に而、爲天下奉恐慶候、是邊之儀、得と勝等も奉體仕らでは不相濟候、先は乍恐御答までに奉言上候頓首百拜。
十一月十四日

大久保利通

書簡

被爲捕御安祥被成御座奉敬賀候、然らば明十二日、遮而御示談申上度事件有之、乍御苦勞第七字より御參朝被成下様奉願候、御旅宿へ出頭可仕之處、外御同寮へも相願候に付、乍略儀此段奉拜祈候以上。
五月十一日
大久保一藏
後藤象二郎様
板垣退助様

西郷隆盛

世上毀譽輕似塵、眼前百事爲耶真、追思孤島幽因樂、不在今人在古人。南洲

伊藤博文

書簡

御多忙拜察仕候、陳者、小子辭表速ニ接御裁可之恩命、度日夜夫ノミ相待居候間、閣下之御配神を懇願仕候、且又此際經濟會議員、及東宮伺候も併テ御免有様御執斗是又奉願候、若シ別ニ辭表ヲ必要トスル儀に御座候得バ、屬官へ御内命被下御取斗願上候、不素之知遇ニ甘へ、恐悚之至ニ得候共、心事御諒察可被下候、爲其勿々頓首。
六月二十九日
田中宮相閣下
再伸、勳爵辭退之儀ハ、常則ヲ以御許可難ニ相成ニ乎も難測候得共、今日迄辛苦報効ヲ圖りし微忠、御憐愍ヲ仰クノ外無之、此段御含可被下候。
博文

副島種臣

詩

絕句

關帝廟前擊櫓廻、小瀛洲外唱歌回、湖山有主休相怪、我是曾觀大海來、
青萍見招、以事不赴賦贈。

手紙の文句も少く
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす

藤家浦大 厨子
藤通利保久大

手紙の文句も少く
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす

藤氏郎太平田藤 厨男
藤九半戸木

手紙の文句も少く
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす

副島種臣 筆 (左)

矢島浦太郎氏 藏

手紙の文句も少く
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす

藤氏郎次半田富

藤文博 藤伊

手紙の文句も少く
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす
かたがたの形に明かす

西郷隆盛 筆 (右)

伯野 土方久元氏 藏

勝安房

書

大智大勇必能忍小恥小忿。

山岡鐵太郎

書簡

西郷大人へ御出御約束之通りにて御歸り酒持參之事者先方迷惑ニ相成候とも存候間御見合相願候。海江田氏も殊之外盡力いたし候故萬事ヲタヤカニ祈申候。已上。

八月十四日

克己齋大兄

鐵舟

僧月照

辭世

曇なきころの月もさつま湯

沖の浪間に屋かて入ぬる

大君の爲にはなにかをしからん

さつまのせとに身はしつむとも

陸奥宗光

詩

壯志未酬餘短身。斯行豈敢避酸辛。政治何日向開化。皇道如今屬維新。天下安危歸冷眼。邦家柱石果誰人。一封泣草濟時表。不見此君與此民。錄舊製。

陸奥宗光

榎本武揚

詩

萍動奇蛇渡水。荷疎白鷺窺魚。

錄先師霞舟友野先生句

梁川生

不若大馬車以成其六世小念

西分大人の御書

御書
御書
御書
御書
御書
御書
御書
御書
御書
御書

筆 郎 太 鐵 岡 山

月照

筆 照 月 僧

志未酬餘程身影行量敢避隨事政治何日向矣化

皇道如金馬維新天下安是歸吟眼初家柱

藏 氏 郎 七 友 野 小

皇道如金馬維新天下安是歸吟眼初家柱
石果誰人一對位料清時表不負以 君と女長

藏 氏 郎 太 寅 堀 四 露 侯

志未酬餘程身影行量敢避隨事政治何日向矣化
皇道如金馬維新天下安是歸吟眼初家柱
石果誰人一對位料清時表不負以 君と女長

汪書製

陸奥志元

(右)筆 光 宗 與 陸
藏 氏 一 榮 澤 蓋 爵 男

洋動青枕波有荷
疎白野窺魚果川生

(左)筆 揚 武 本 樓
藏 氏 水 常 田 福

栗本鋤雲

詩

門巷蕭條夜色悲。鶴鷓聲在月前枝。誰憐孤帳寒檠下。白髮遺臣讀楚辭。

小野梓

書簡

昨日御出被下候由、折節梅やしきへ罷越、誠に失禮ニ御座候。何歟御急きの御よふはこれ無くや、但しは伊賀之御都合ともには無之哉、今日御宅へ御尋可仕心得ニ御座候處、少々風邪之心地に御座候得者、罷出かたく、幸に御近邊へ使者指出候へは、一寸御尋申上候。何れ明日者、共存同會へ出席可仕候へは其節萬事可申上、先づは御都合如何哉ト、御伺申上候也。

六月十八日

馬場様

梓

廣澤眞臣

書

功速成則亦速敗、勤勞無怠、

庚午正月

障嶽

元田永孚

詩

渾然流動性之情、不費作爲長滿盈。據德依仁常自在、樂天安命又何爭。尊卑有分總歸禮、內外無間一是誠。悟得人心道心別、始知斯理正精明。

重野安繹

書

祥烟擁高臺物呈喜色春如海。瑞穗溢堂嶋天錫遐齡米作年。

浪華春海氏北堂八十八壽言

中村敬宇

詩

悠然清思渺江天不在。眠鷗去鷺邊說與雲山都不應。數聲柔櫓乍歸船。

門卷首條不之悲勝跡多五月古枝
確據不味紫不之登迷臣諸於程一寒
於剛即先主外之後古國 於者 四

廣澤真臣筆

伯野 廣澤金次郎氏藏

功速成則亦速敗勸勞
無怠 庚午正月障蔽

野小 筆
何欲多急きの情
よふいふれをく心也
し。伊美。い。の。前。の。ま
ま。ま。ま。い。の。前。の。ま
書。一。身。の。ま。ま。い。の。前。の。ま
身。を。ま。ま。い。の。前。の。ま
心。地。を。ま。ま。い。の。前。の。ま
身。を。ま。ま。い。の。前。の。ま
由。也。自。邊。一。使。者。探。公
あ。一。子。の。身。の。ま。ま。い。の。前。の。ま
此。の。身。の。ま。ま。い。の。前。の。ま
一。身。の。ま。ま。い。の。前。の。ま
身。を。ま。ま。い。の。前。の。ま
心。地。を。ま。ま。い。の。前。の。ま
身。を。ま。ま。い。の。前。の。ま
由。也。自。邊。一。使。者。探。公
あ。一。子。の。身。の。ま。ま。い。の。前。の。ま
此。の。身。の。ま。ま。い。の。前。の。ま
一。身。の。ま。ま。い。の。前。の。ま
身。を。ま。ま。い。の。前。の。ま
心。地。を。ま。ま。い。の。前。の。ま
身。を。ま。ま。い。の。前。の。ま

筆 梓 野 小

元 田 永 字 筆
千 葉 立 氏 藏

渾然流動性之情不費作為
長清且攝德依仁常自在
樂天安命又何事尊卑有
分然歸禮內外若間一足
誠悟得人心道心別始知斯
理正精明 東年臨 題

重野安禪筆

重野和一郎氏藏

祥烟旌高堂物呈喜色
春如海 瑞穂溢堂尚
天錫遐齡未作年

法華寺春陽氏北堂分筆

藏書堂春陽氏筆

中村敬宇筆

關根正直氏藏

世世清品游山都上應表存志精之仙和
波曲雲山都上應表存志精之仙和

前守 藏

森 有 禮

訓令

帝國大學

其學校ニ於テ、教授方法ニ用ヒ來リタル數個ノ外國語ハ、明治二十七八年限リ廢止シ、二十八年八月ヨリ、英吉利語ヲ以テ其用ニ充ツヘシ。但學科ニ依リ、本文ノ趣意ニ則トリ得ヘキモノハ、來學年ヨリ之ヲ決行スベシ。

文部省編輯局事業要項

第一編輯事業

- 一 完全ノ教科書ヲ編輯シテ、小學校及師範學校ニ供給スル事。
 - 一 其教科書ノ中、師範學校、及小學校、殊ニ簡易科ニ供給スルモノハ、貸與或ハ給與スルヲ以テ、目的トスル事。
 - 一 民間ノ編輯ニ係ル、完善ノ教科書ハ、師範學校及小學校簡易科ノ用ニ供スヘキモノトイヘトモ、陸續トシテ出サシムルノ方法ヲ立ル事。
 - 一 中學校及高等小學校教科書ハ、其編輯主意書ヲ明ニシテ、公私共ニ完善ノ稿案ヲ出サシムルノ方法ヲ立ル事。
 - 一 大學及專門學科ニ係ル教科書ハ、専ラ私著ヲ獎勵シテ、其中最完善ナルモノヲ用ルノ方法ヲ立ル事。
- 第二出版製本事業
- 一 其事業ノ費用ヲ最少額ニシテ需用者ノ便利ヲ進ムル事。
 - 一 國庫ノ支出ニ係ル、教科書編輯出版製本等ニ係ル費額ヲシテ、最低度ニ居ラシムルノ方法ヲ立ル事。
 - 一 但シ師範學校、小學校簡易科ノ用ニ供スヘキモノハ、其費額ヲ最低度ニ定ムル方法ヲ立ル事。
- 第三檢定規則
- 一 檢定無私ノ方法ヲ立ル事。
 - 一 檢定無誤ノ方法ヲ立ル事。
 - 一 檢定速終ノ方法ヲ立ル事。

新 島 襄

書簡

謹啓。其後御起居如何愼而奉伺候。陳者先夜特殊之御高配を蒙り候而、明治專門校募集之件も、意外之好都合に相運候耳ならず、閣下よりも多分之金額御惠投可被下旨、千萬忝く奉存深く奉拜謝候。其後一兩回、右御禮之爲參趨仕候處、御不在に而拜謁を得ざりしは、遺憾此事に候。小生も御蔭を以而爾來益々體を得對を望むの感を起し、彌々奮勵仕貴論に隨ひ、他日之計を爲さん爲、暫く休養仕度存じ、去廿四日出京、一兩日前橋に滞留、一昨日當所に安着仕候。其後格別之疲勞も覺へず、又病變も無之候間、乍憚御休慮可賜候。此炎暑中閣下にも當所に御來遊相成候はゞ、幸甚之事と奉存候。右閣下之御好意奉陳謝旁、御起居奉伺度如此候也。敬具。

七月廿八日

新 島 襄

大 隈 伯殿閣下

尙々、小生輩之企候專門校は將來、是非民間之大學になし度奉存候間、末久しく閣下之御贊翊ト御高庇を奉仰候。

奥 村 五 百 子

書簡

杉山先生へよろしく
一筆御祝ひ申納候。扱此度は存じよらぬ御目出度御事にて、實に御嬉しく存上候。御前様御一代の御名譽ならず、御子孫迄御名譽一入御目出度申納候。

嬉しさのあまりに

名も高く船出したもふ君なれば古郷へ錦きて歸り給へ
御伺申上事も、申上度事も、海山に御座候へ共、何れ御目もじの上萬々申上度、先は御よろこび迄、荒々芽出度かしく。

三月十四日

小 笠 原 長 生 様

奥 村 五 百 子

福 澤 諭 吉

詩

贈學生

言是扶桑冠海東國光須與旭光同他山之石取無盡莫惜十分攻玉功。

品川彌二郎

松陰先生の遺訓

吾幼にして漢籍にのみ浸淫して、尊き皇國の事には甚だ疎ければ、事々に恥思ふも多けれど、試に思ふ所と見聞する所とを擧て、自ら省み、且は同志の人々へも示す也。抑皇統綿々千萬世に傳りて變易なき事、偶然に非ずして、即ち皇道の基本、亦爰にあるなり。蓋天照太神の神器を、天孫瓊々杵尊に傳玉へるや、寶祚之隆興、天壤無窮の御誓あり。されば漢上天竺の臣道は吾知らず、皇國に於ては、寶祚素より無窮なれば、臣道も亦無窮なる事、深く思を留むべし。更に又祈年祭の祝詞に謂へる、狹國は廣く、峻國は平く、島の八十島陸事無また遠國は、八十網打掛て引寄如事などいふ事、いたづらに考ふべからず。臣道いかにぞと問はば、天押日命のことたてに、海行は水つく屍、山行は草むす屍、大君のへにこそ死なぬ、のとは死なし、是なん臣道ならん。さて中世以來、漢籍大に世に行はれ、殊に孔夫子を道の宗師と仰しにぞ、論語は先儒も最上至極、宇宙第一の書と稱せられたるが、其言に感せし人も少なからず、中にも兒島高德の志士仁人、間有殺身以成仁、見義不爲無勇也の如く、加藤前田の可以託六尺之孤、可以寄百里之命、臨大節而不可奪の如きは、實に吾黨の師と云ふべし。松陰二十一回猛士先生遺訓之一、明治三十一年十二月、加茂君の需めに應じて。

尊攘堂主人やし拜書

廣瀨武夫

詩

正氣歌

死生有命不足論、鞠躬唯應酬至尊。奮躍赴難不辭死、慷慨就義日本魂。一世義烈赤穂里、三代忠勇楠子門。憂憤投身薩摩海、慷慨就義小墓原。或爲芳野廟前壁、遺烈千年見鐵痕。或爲菅家筑紫月、詞存忠愛不知冤。可見正氣滿乾坤、一氣磅礴萬古存。嗚呼正氣畢竟在誠字、嗚呼誠字必要多言。誠哉誠哉斃不已、七生人間報國恩。

三島通庸

歌

赤心報皇國

薩藩武臣 三島彌兵衛通庸

皇國の御代安けれと、武士のあかき心をつくす今日哉

成島柳北

文

雜錄下

大道徳家に一問せん

近來誰レ言フト無ク、支那流ノ道徳道徳ト云フコトノ耳染ニ入ルヲ覺フ。借何人カ能ク其ノ身ニ道徳ナ行ナレ得ルヤト視察スレバ、多クノ人員中ニ於テ、一向ニ見當ラザル様ナリ。然ラバ則チ虚喝カ、其レ然リ覺其レ然ラシヤ。自己不道徳ニシテ、世人ニ責ムルニ道徳ヲ以テス。是レ到底行ハレ難キコト、居士ハ斷定セザルヲ得ズ、然レニ其ノ流行スルヤ、必ズ眞ノ道徳ノ本店アラン。頃日又一ノ道徳問屋開業セリ、其名ヲ集義社ト申ス、其ノ廣告ヲ讀メバ、曰ク、本館ハ一ニ孔子ヲ以テ宗ト爲シ、心術ヲ正シ、國體ヲ重シ云々、猶種々ノ條目アリ、又生徒ノ學期ハ三年ニテ、初年ハ論孟學庸、大日本史、左傳、八家文、杜甫ノ詩等ナリ。二年ハ近思錄、詩書、日本紀、荀子、韓子等ニテ、三年ハ周易、周易、史記、合義解、萬葉集、韓非、莊子等ナリ。而シテ西洋書亦數官ノ取捨ニテ、用フ可キハ探ルトノ編レ出シナリ。斯文會ノ規則ニモ、曾テ其標ナコトカ有ラケナシ。盛ナル哉此館ヤ、初年ニ學庸論孟ヲ講究シ、二年ニ朱熹ハ近思錄ニ立戻リ、未ダ支那一部ノ史ヲ讀ムコト無クシテ、八家文ヲ講ズル杯、亦妙ト謂フ可シ。且ツ孔丘ハ如何ナル處ニ於テ、國體ヲ論セシカ、知ラズ何ヲ以テ此論ニ此人ヲ宗トシ得ルヤ、且ツ泰西ノ書ニ觀ル可キモノ多シトテ、之ヲ探ルト云フハ、是亦知ラズ何等ノ書籍ナルヤ、何等ノ學科ナルヤ、居士太ダ其ノ漠然タルニ惑フ。嗚呼入會ノ納金ハ二十五圓ナリト、二十五圓ノ金ハ判任官ノ月給ナリ、以テ尋常一家一月ノ暮ラシニ供スルニ足レリ、居士ハ之ヲ道徳問屋ニ來ルハ、少シク閉口至極ニ思ハザルヲ得ズ。借問ス二十五圓丈ケノ利益必ズ有リヤ否ヤ。

税所敦子

歌

月照雪

くるゝまでふりし、みゆきのうへにいま月やさすらむまつのかけみゆ

吾の如く漢籍を讀み或は漢書一十卷を讀み... (Main vertical text block)

廣瀬武夫筆

石田 行氏藏

心氣歌

死生有命不足論... 義日本魂一世義烈赤穂里三代... (Poem text)

廣瀬武夫

三島通庸筆

子爵 三島 康 藏

赤心 皇國 報 薩藩武臣 三島通庸

稅所致子筆

山 田 富 藏 藏

廣瀬武夫藏

成島 御北 筆

下 〇... (Small vertical text block)

力 應 曹

Handwritten signature in cursive (likely 山田富藏)

第二十四輯豫告

玻璃版

- 天誅組の布告
- 明治大正婦人風俗
- 我國最初の航空船
- 思ひ出の風景
- 明治大正の名士

記事

- 「幕末 文化大年表」(二十八頁)……
- 「皇室御略系譜及官制沿革篇」(三十二頁)……
- 「帝國議會」(十頁)……
- 「明治二年 列藩要鑑」(二十頁)……
- 「大正 文化大年表」(十頁)……
- 「大正 官制沿革篇」(十六頁)……

○本第二十三輯には地色二色版を以つて幕末及び明治時代の名士の遺筆を掲げる事とした。此等維新の風雲に乗じて縦横に活躍した志士の風爽たる風采は既に掲載せる寫眞に於いて見らるゝ、通であるが、今此の墨色淋漓たる遺筆を見れば、其風懷の崇高なるに誠に敬仰せざるを得ない。

○殊に其人の人格は筆蹟に現はれるものであるが、此遺墨を見れば正に其眞なるを感ずるのである。或は豪快、或は洒脱、或は繊細、或は謹嚴、或は奔放不羈、誠によく其人を表はして興味津津たるものがある。

○高杉晋作の「されて呉れろとやわらかに……」の蜀魂の小唄や坂本龍馬の「此手がみ人にはけしきく見せられんぞよ」と「おとめさま」へ與へたる手紙等は、此無骨らしき長州及び海南の志士が案外なる優しき一面を示し又劍戟の巷にあつて猶紳々たる餘裕を見せて居るものも面白いと思ふ。

○成島柳北の「大道徳家に一間せん」の一文の如きも辛辣なる皮肉であつて「學商」の横行する現代に對しても正に頂門の一針である、「嗚呼入會納金ハ二十五圓ナリト……」借問二十五圓丈ケの利益必ス有リヤ否ヤ」の一句には蓋し現代の學商も苦笑禁ずる能はざるものがあると思はれる。

昭和十年九月二十日印刷納本
昭和十年九月廿五日發行

「幕末 回顧八十年史」 第二十三輯
定價 金壹圓貳拾錢 (郵費及海外は送料別)

編輯兼 發行所 東京市京橋區東區五丁目四番地 大澤 米造

印刷所 東京市神田區錦町三丁目十九番地 早川 一郎

印刷所 東京市千代田區西川町十番地 井口印刷合名會社

發行所 東京市京橋區東區五丁目四番地 東洋文化協會

取 扱 所

大阪市北區堂島上三丁目一番地 萬 伸 社 電話北一八二九番	神戸市楠町一丁目一番地 博文 社 電話元一七六三番
關西一子 萬 伸 社 電話北一八二九番	大津市西區八幡町八番地 東洋文化協會關西支部 電話大津二六八八番
大阪市日吉區阿倍野五ノ六五 東洋文化協會關西支部 電話大津二六八八番	京 城 北 水 會 社 電話北一七〇二番
大阪市北區堂島上三丁目一番地 萬 伸 社 電話北一八二九番	東京市京橋區東區五丁目四番地 東洋文化協會大阪支部 電話東京三三三四八番

正に絶好の史料である。

終

